

王元章

孫從吉一家

僧月泉の葡
萄畫

趙虎

支那繪畫史

一七八

となす。王元章名は高才放逸にして其墨梅古今に冠絶すといはる。畫上必らず親ら題詠を爲す、蕭灑不羣なりといふ。其の門流に周昊、袁子初等あり。蓋し墨竹の夏仲昭と並馳するものか。孫從吉は永樂中、孫梅花と稱され、夏仲昭と名を齊うして仲昭の畫竹と價を同うせり。其女孫夫人、父の法を傳へて孫梅花の稱を擅にし、其女婿、任道遜も亦婦翁の法を得て蒼涼致多しといふ。其他、盛安の豪縱にして爽趣なる、王謙、金琮、陳録等の蒼勁幽逸なる、共に一時の撰たり。

此等の墨竹墨梅の外、蔬果に於ては釋可浩月泉との葡萄其名最も高く、枝葉俱に生氣を宿し、直に宋末僧日觀の墨を摩す。

此等墨戲の外、趙廉は虎を善して趙虎といはれ、韓秀實は洪宣の間、書馬を以て内殿に供事し、許通、劉叔雅の畫牛は戴嵩に顔頑すと稱され、其餘、手舜耕、張德輝の龍に於ける、亦一時の撰たり。

第二章 清朝の繪畫

清朝文化の
特質

第一節

清朝文化の概見

滿人、明を亡してより此に二百五十餘年の星霜を経たりと雖も、もと滿人の朱明に代りたるは、勝を政權の上に得たるのみにして、其文化は明風清を覆ひて一途の發展を遂げたるものなれば清朝の制度文物は、大抵明の遺風を存し、其思潮亦前代の餘波を揚げき。されば清朝の學風の如き、明代の形式、擬古の學風より一轉して考證の學となり、一代の學風をして訓古注釋に傾かしむるに至れり。これ一は明代復古の氣運、國初興國の勢につれ、一轉して學術上に及び、宋儒の哲學的思想辨的學風に反抗して、漢唐の文獻學的形式的學風に復歸したるに由り、又一には清朝の漢人種ならざるより、國民の排外的思想を鎮壓するの必要に迫られ、學者をして書齋的考證の研究に一生を委ねて、また世事を論ずるの暇なからしめんと欲し、學者を羅致して百代の典據となるべき大編著に従事せしめたる、人爲的施政方針の結果に由るならむ。

されば國初聖祖、世宗、高宗の明君三世相繼て立ち、文學を奨勵し、書局を開き、以て清朝の基礎を定めたる、康熙、乾隆の治世には、閻若璩等の考據

康熙乾隆の
治世

第三篇 近世史

一七九

清朝繪畫の特色

學、吳梅村、王漁洋の詩、金聖歎の小説等前後崛起し、明史、佩文韻府、淵鑑類函、佩文齋書譜、康熙字典、西清古鑑、四庫全書提要、大清會典、大清一統志等の大編著行はれ、興國の氣運、文學の隆盛を致し、博證精緻、考據を以て儒家の面目となすに至れり。時代思潮、既に斯の如くなりしかば、清朝の詩、文の如き、大抵、内容、思想よりも外形、文字を重んじ、風骨、氣韻の高きものなくして聲調詞藻、豊麗を以て優るものあるが如く、其風尚は自然に當代の書苑にも影響を及ぼし、其花鳥は黃氏體を祖述せる佳麗なる周之冕、呂紀等の門葉の流行を來し、更に徐氏體より脱化せる細巧なる寫生風の、純没骨畫を生じ、渾壽平出で、寫生の正派と稱され、海内の畫人皆これに倣ひて、終に常州派の目あるに至れり。當時、四海昌平にして士夫文人多く優游風雅に富み、所謂、文人、士夫畫の流行を來し、書卷の氣風一世を覆ひて、畫道の上に影響し、明代に於て沈文、董、陳によりて啓發せられたる文人畫の風尚と相投合して、謂ゆる明、清畫の隆盛を見るに至れり。而してかゝる趨勢は前章に於て既に述べたるが如く、明末萬歴の頃より康熙、

清朝の内廷供奉

乾隆の間を通じて一貫せる状態にして、吳梅村の畫中九友、崇禎末の畫社玉山高隱の十三家など、何れも明、清の二代に跨がり、明末より清朝の山水畫をして全く明、清畫の獨占場とならしむるに至れり。其畫風家々其様式を異にするあるも、概して輕軟の風を存し、其文學の風骨氣韻の高きもの少なきと一般、又其筆致圓潤なるも力弱きこと猶明、清の書風に於けるが如し。清朝には宋、明の如く畫院を設けて階級を授くる等のこと無かりしが如きも、内廷供奉の畫人ありて、朝廷に於ける書を司りたるが如し。蓋し、康熙、乾隆の際、聖祖、高宗の大いに文學を好み、文藝を奨励せしかば、畫道も亦文運の隆盛につれて興隆し、朝廷に徵れて内廷に供奉となれるものも亦少なからず。康熙の朝には焦秉貞、西洋畫の法を取りて一新機軸を出せる寫照を以て内廷の祇候となり、顧見龍、徐璋も亦寫真を以て内廷に祇候たり。王原祁、董誥は内廷に供奉して古今の名畫を鑒定し、嘗て聖祖の南書房に幸するに際して供奉となり、詔を受けて山水を畫く、聖祖几に憑りて之を觀、日の移るを覺えざりきと。其他鄒元斗、高樂安、葉陶、山水、大、釋成衡の内廷に祇候し、

釋覆千は詔を受けて王原祁を師とし司農代筆となりたり。世祖の朝には、孟永光孫克宏を人物寫眞を以て内廷に祗候し、謝淞洲倪黃及宋人の筆意を兼ぬのは雍正の初命を受けて内府所藏の眞蹟を鑑別し、因に畫く所の山水を進め、留まること一載にして、疾を以て罷め歸り。更に乾隆の際には、唐岱は余省と共に山水を以て内廷に直し、袁江、陳枚、賀金昆等も亦共に憲廟に事へて内廷に供奉せり。又乾隆十六年、聖駕南に進むに當り、張宗蒼黃尊古の門畫冊を進めて恩賞を蒙り、命を受け都に上りて内廷に祗候たり。

斯の如く康熙、雍正、乾隆の百三十餘年間は、學術技藝の最も進歩したる時代にして、武功の盛なることも亦前古に超出せり。蓋し清朝の盛は高宗の乾隆の際に至りて其絶頂に達したるが如く、たゞそれ物極まれば變ず、其衰運に導きたる原因も、亦其晩年に伏在したるもの、如し。高宗在位六十年にして位を讓る、此を仁宗皇帝といふ。爾來、教匪、海盜及び回部の亂起り、外國との交渉頻繁を加へ、國事漸く多難となりしかば、仁宗の嘉慶以後は、國運の振はざると共に、藝術の華も亦著しく色褪せ、今や却りて支那文藝の

藝術衰退

繼紹者たる日東の隆盛に及ばざること遠し。

第二節 山水畫

南畫勃興の
原因
家と其様式
を異にす
乾筆點曳の
手法

上述の如く山水畫は、前代、沈石田、文徵明、董其昌、陳繼儒等の輩崛起し、其の聲望藝苑を傾けて翰墨壇上の首望となり、其尙南、北の論畫は、一世を風靡せしかば、明の嘉靖、萬曆の頃より吳派大に勃興し來りしが、更に清朝の康熙、乾隆の際に及び、當時四海昌平にして士夫皆優游風雅の思想に富み、其高懷、逸興の風尙は、益々南畫の本領と相投合し、清朝三百年の藝苑をして獨り南宗の占領する所とならしめたり。唯夫れ均しく南宗と稱するも、家々各々其様式を異にし、其變化千態萬狀なりとす。而して其畫風大抵明代沈文、董、陳の末流に屬し、其技術の自由にして精巧なる浙派、並に其他の健實精妍の風廢れて、渴筆の抹擦と淡墨渲染及び淺絳烘染の諸法を以て畫調を成するもの多くなり。庚浦山の頃には、此等の諸法の中に於ても、専ら乾筆點曳を事にするもの多かりしが如し。されば庚浦山の言ふ所に依れば、唐、宋の人、山水を畫くに多く溼筆を用ふ、故に水暈墨章といひき。元

季の四家に迫んで始めて乾筆を用ふ。明に至りて董其昌、倪黃兩家の法を合し、純ら枯筆乾墨を以てす。然れども是れ亦晩年偶々然るのみ、今人之を便とし遂に以て藝林の絶品と爲し、争ふて之に趨る。骨幹老逸なるが如きも、氣運生動の法に於て失ふこと遠し、蓋し溼筆は難工にして乾筆は爲し易く、溼筆薄に流れ易く、乾筆厚を見るに易し、又溼筆渲染功を費し、乾筆點曳便ち是に捷つ、是を以て争ふて之に趨る、是に由て作者觀者耳食を一にし、相與に侈大矜張して遂に盛に特に行はれ、溼筆を以て俗工と爲して之を棄つ。然れども畫は乾溼互用を尙ぶべし。王原祁晩年梅道人の墨法を好む、蓋し亦董源の意を會するものなりと。錢大昕又曰く、近來の畫、簡遠超妙と爲すも、實は乃ち盡く古法を失ふと。蓋し清朝の畫山水、多く宋の董巨、元季の四大家等を祖述すと傳へ、所作の欸識にも自ら董巨に倣ふなど、記せるもの多しと雖も、實は沈文、董、陳の末流に屬し、其技巧漸く一定の典型に陥りて頗る自由の態度を缺き、宋、元の風格を見るもの稀なるを致せり。殊に董其昌の筆墨の精微を折ち、宋、元の異同を究めて藝苑の首望となりしより、

後の士人争ふて之を慕ひ、當時、董其昌を中心とせる華亭の一派、首として藝苑に推されたりしが如きも、其心目文敏の爲に壓せられ、學者多く點擬拂規たゞ之を失はざらんことを務め、徒に其皮毛を襲ふて其精髓を忘れ、遂に流れて習氣を成すに至れりといふ。然れども清朝の山水畫は、其技巧に就き之を大勢の上より觀察するに、たとひ健實精妍の風に缺くる所あるも、其筆致圓潤の趣を有し、其乾溼互用の上乘なるものに至りては、秀潤の氣、畫面に洋溢し、其水氣豊かなる處、模倣し易からざるものありて、清朝畫山水の特色を發揮せり。殊に明清の所作を以て、主として文人畫と稱する、が如く、淡泊の風致を主として技巧の精微を求めざる中に、莫大の詩趣を寓し、畫外に洒脫書卷の氣横溢して、其職業的ならざる一種の風格を發展したる點は、やがて支那山水畫の一發展となすを得べきか。

斯の如く清朝の畫苑は、南宗獨り盛にして、北宗殆ど漸滅に就きたりと雖も、明末より國初に亘り、浙派の祖、戴文進の衣鉢を紹ぎ、蔣嵩、張路等の

粗獷頽放の弊風を一洗して、清代山水畫に健實精妍の美を添へ、吳派の爲めに浙習と嫌はれ、俗惡と評せらるゝ中に、浙派の後勁として嶄然一頭地を拔きたるものを藍瑛となす。瑛字は田叔、號は石頭陀といふ。初め黃子久等を究めて其風秀潤なりしが、晚境、浙派の意を得て筆力益々蒼勁なりしといふ。蓋し藍瑛に至りて南北を合して一となし、以て其精藝を成すに至りしものか。藍瑛及其徒の遺墨は支那に重せられざりしが爲めに、我國に流傳するもの甚だ多く、其畫風、健實精妍の妙を存し、正に浙派の本領を窺ふに足れり。其子、藍濤、藍孟及び其徒、陳璇、王奐、馮湜、顧星、洪都、蘇誼、禹之鼎、吳訥、丁錫、龔振、王獻、胡眉等亦其畫風を傳ふ。

然れども清朝山水畫の典型を定立し、最も名聲の畫苑に高かりしを、明末より國初に於ける江左の三王、王時敏、王翬、王翬となす。王時敏、烟客と號す、詩文を善し、最も八分の書に長ず。古今の名蹟を涉獵し、布置、設色、鈎勒、研拂、水暈、墨彰悉く根柢ありといはる。最も黃子久の墨妙を得、論者一峰老人の

正法眼藏を以て時敏に歸せり。されば曾て董其昌、陳繼儒の爲に、文敏の傳燈、眞源の嫡流、畫苑の領袖と呼ばれき。時に四方の畫を善するもの、題、門に接して其指授を得たるもの甚だ多く、王翬の如きは其首なる者とす。當時王時敏と名を齊うし、董源、巨然の室に入り、其皴擦爽朗にして暈染を嚴にし、以て沈雄古逸の氣に勝てるを王鑑となす。字は元照、王廉州とも稱す。曾て廉州の太守となりたるが故なり。王翬州の孫にして畫理に精通せり。王時敏と同郷にして亦親戚なりしかば、互に相砥礪して益々其妙を發揮せりとす。いふ。されば王時敏、王鑑の二家は、斯道開繼の功ありと謂はる。而してこの二家の薰陶に大成し、南北兩宗を融治して一となし、曹倦圃、吳梅村等の爲に畫聖と稱されし王翬出で、更に此派を盛にせしかば、清朝の山水は殆んどこの三家によりて其典型を定められたるの觀あり。世にこれを江左の三王といふ。王翬字は石谷、耕烟外史と號す。曾て王鑑、虞山に遊ぶ、翬、畫扇を以て王鑑に呈す、鑑、大に驚歎し、遂に師弟の交を通ず、乃ち翬をして先づ古法書を學ばしめ、數月にして親しく古人の名蹟、稿本を指授す、其技

王暈の論書

王原祁

大に進む。既にして鑑、遠宦の故を以て、暈を王時敏に引謁せしむ。時敏其學を叩き歎じて曰く、是れ烟客の時敏の師なり、乃ち烟客を師とせんやと、遂に共に江南、江北に遊ぶ。かくて親く二王の薰陶を受け、遂に南北を合して一代の作家となり、百年來の第一人と謂るに至り。其畫風、清麗にして、筆墨の妙趣を融治せり。曾て書を論じて曰く、畫に明あり暗あり鳥の雙翼の如く偏廢すべからず、又曰く繁は重なるべからず、密は窒なるべからず、伸手放脚、寬閒自在なるを要す。又曰く元人の筆墨を以て宋人の邱壑を運び、而も澤するに唐人の氣韻を以てせば乃ち大成と爲すと。又曰く、凡青綠を設る、體嚴重にして、氣輕清なるを要す、力を得るは全く渲暈に在り、余、青綠に於て靜悟三十年にして始めて其妙を盡す。又以て其根源の深を知るに足ん。されば三王の畫風、一代を風靡し、其の門流頗る多く、王時敏の子王撰、其の徒吳歷、王鑑の徒王原祁、薛宣、通證、上睿、王暈の徒揚晉、胡竹君、徐溶、宋駿業、王鑑、顧卓、金堅學、袁慰祖、楊恢基等、共に其の畫風を傳ふ。其中吳歷、王原祁最も著れ、殊に王原祁は祖父、王時敏の精藝を傳へ、

四王

大癡、黄子の淺絳に於て最も獨絶と稱され、書卷の氣盎然として楮墨の外に溢ると謂はれたる手腕を以て、寧ろ行家の習氣ありと謂はれたる王石谷に對峙したるの觀あり。されば庚補山言ふ、王原祁出世の時は、虞山王暈の清麗の筆を以て、名聲中外を傾ける時なり、原祁、高曠の品を以て之を突過す。世推して大家となすと。王原祁字は茂京、麓臺と號す。曾て内廷に供奉して古今の名書畫を鑒定し、少司麓と爲り、書畫譜總裁に充てらる。未だ幼なかりし時、偶々山水小幅を作る、祖父、王時敏之を見、訝て曰く、此子、業必ず我右に出でんと、爲に六法の要、古今異同の辨、並に南宮獲雋を講ず、又曰く、汝幸に進士となる宜しく専心畫理を研めて以て我學を繼ぐべしと。是より筆法大に進み、名聲畫苑を傾け、前述の三王と共に四王と稱され、門下多し、其神を得るものは董宗伯、昌其形を得るものは予敢て譲らず、若し形神俱に得るが如きは吾孫其に庶きかと、鑑深く之を然りとす。晩年好んで梅華道

虞山派
婁東派

新安派
松江派
姑熟派

人の墨法を作り、最も神味を得たりと謂はる。其徒に華鯤、金明吉、唐岱、王敬銘、黃鼎、王翬の法、趙曉、溫儀、曹培源、李為憲、釋覆千、吳應枚、吳振武、王昱等あり、張棟、呂猶龍等亦其風に倣ふ。而して王翬の末流を虞山派といひ、廣く諸體にも出入して、格の清麗、遒潤を尙び、王原祁の後を婁東派と稱し、専ら氣韻の高曠を傳ふ。王原祁の徒、黃鼎は、王時敏の徒、吳歷の徒、成の書亦これより出づと謂はる。其末流に奚岡、李良其あり。吳歷の門に魏、陸道淮、王者佐、胡節等あり、其畫風厚渾を以て勝る。此等の流派の外、尙、新安派、松江派、姑熟派、あり、新安の畫家の多く清閑を宗となすに至りたるは、江、西、派、金、陵、派、などあり、松、江、派、董、其、昌、の法を紹きたる趙文度、馮景夏、黑壽など同じく、董其昌の法は、查士標、汪之瑞、周生弟、李釋弘、仁、と共、海、陽、の、四、大、家、と、謂、は、れ、た、る、が、如、く、姑、熟、の、一、派、並稱して、江、左、の、二、家、と、稱、さ、れ、し、蕭、雲、從、も、人、物、善、す、を、以、て、其、の、祖、と、な、す、蕭、雲、從、

海陽の四大

家

江西派
金陵八家

は或はまた陳延と共に、畫院の二妙と呼ばれたる高手にして、其の畫風宗法を専らにせず、自ら一家を成して高森蒼潤の趣を有し、格力の見るべきものありといふ。また上述の四大家の中、畫名の最も高かりしを孫逸となす。南、北、各、家、の、法、を、兼、ね、文、待、詔、の、後、身、と、謂、は、る。また四大家中の查士標は、程正、葵、曹、岳、趙、文、度、宋、石、門、普、荷、馮、景、夏、黑、壽、な、ど、と、同、じ、く、董、其、昌、の、法、を、傳、へ、其、聲、價、孫、逸、と、均、く、其、門、弟、に、何、文、燿、釋、石、莊、等、あり、江、西、派、は、羅、牧、より創まる。羅牧、寧、都、に、崛起し、壯快の健筆、別に一風を出し、名、公、卿、士、夫、を、動、か、し、江、西、の、學、者、多、く、之、を、宗、と、す。呂、煥、成、の、遺、品、こ、れ、に、酷、似、す、と、い、ふ、更、に、龔、賢、其、徒、に、王、を、首、と、し、て、樊、圻、高、岑、鄒、喆、吳、宏、葉、欣、胡、造、謝、蓀、あ、り、之、を、金、陵、の、八、家、と、い、ふ。浦、山、の、言、ふ、所、に、よ、れ、ば、均、し、く、金、陵、の、一、派、と、い、ふ、も、其、間、自、ら、浙、派、に、類、する、もの、と、松、江、派、に、類、する、もの、の、別、あり、と、い、ふ、蓋、し、龔、賢、等、の、畫、風、の、沈、雄、蒼、老、な、る、或、は、江、西、派、の、羅、牧、と、共、に、浙、派、の、風、化、を、受、た、る、な、ら、む。然、れ、ど、も、家、々、各、々、特、長、を、存、し、つ、何、も、南、宗、に、非、ざ、る、は、な、し、其、他、國、初、よ、り、乾、隆、嘉、慶、の、間、に、互、り、一、家、を、南、宗、に、成、し、た、る、も、亦、

頗る多し。顧昉、釋道濟、馮源濟、方丈猷、八大山人、張宏、赫顯、傅山、周之夔、顧豹文、方以智、莊同生、本初、馬昂、沈宗敬、文點、顧大中、管重光、顧豹文、蔡澤、程雲、葉有年、陸癡、翁嵩年、釋覺殘等、何れも自ら一風裁を具ふ、中に就き其名の最も著れたるを顧昉、釋道濟となす。顧昉の畫、骨氣清雋にして而も高厚、所謂有筆有墨にして、畫學の正宗と謂はる。曾て王暈の爲に高古莽蒼、氣韻紙外に溢れ、近來多く之を見ずと激稱され、釋道濟は王原祁の爲めに、江南第一と推稱され、其學徒も亦多し。更に王澤、吳偉業、周鼎、黃向堅、徐枋、趙澄、徐柏齡、萬弘術、釋戒開、上官周、朱文、長、沈宗騫、舟、虎林の章、聲、章、章、株陵の盛、氏等、其名一時に高し、其餘、董邦達、王延格、陳嘉樂、張士英、崇禎末の畫社、玉山、高隱の十三家、沈開微、歸文休、許洽、伯厚、許瑞玉、張炳南、姚孟頌、顧如、多、清初に於ける南宗の人とす、此の外南宗の作者極めて多く、其中、伊孚九、費漢源等は、雍正の頃續いて我長崎に來遊し、先きに明末の亂を避けて我國に渡來したる僧逸然等の、禪餘

畫中十哲
 王山高隱の
 十三家
 日本南畫の
 起原

人物畫法に
 就いて

に墨戲を弄して、始めて明清南畫の緒を開きたるものを啓發して、遂に本邦に於ける南畫の物興を導きたる導火線となれり。

第三節 人物畫の變遷

山水畫家は隋及初唐の繪師、並に院體派等に屬せる少數の行家を外にしては、由來大抵、士夫文人の餘藝なりしも、道釋、人物、界畫等の諸科に至りては、漢、魏、六朝、隋、唐の間は言ふも更なり、中唐以降、清に及んで文人士夫畫の流行益々隆盛に越ける間に於ても、殆んど専門の行家に屬せり。こは曾て徐沁の山水の跋に於て言ひしが如く、筆墨の靈を以て骨次を開拓し、造物と奇を爭ふは、山水に如くは莫く。煙雲滅沒、泉石幽深に當ては、寓する所に随つて之を發し、悠然として心に會し、以て天趣を發揮するに便なるも、人物畫等に至りては、もと描寫の眞を得るを先きとなすが故に、他物を體貌せんとするもの、先づ心を殫し、智を畢し、以て形似を求めて游方の内に規矩するを要す、されば少しく技能あるもの山水を畫くに易く、素人をして斯道に指を染めしむるに便なるに反し、描寫の眞を得るには、多年の研鑽

を要し、専門の技工に待たざるべからず。これ古來より此科に於て専門の行家多しとなす所以なり。若し夫れ繪畫の本領に至りては、諸科共に世俗の眼、視ること能はざる絶高の眞理、即ち自然の裡に潜みたる美なる奥義を破して之を畫帖の上に發揮し、自然に出で、而も自然の開發すべからざる所を形を以て解説するを其本務とす。こゝに至れば尺幅の畫も亦是れ天地の秘奥と人生の意義とを解説する妙諦となり、自然を超越して、乾坤清新の氣漂渺として楮墨の間に溢るゝといふべく、其山水の入り易く、人物等の入り難しといふが如き、單に入門の消息に過ぎずして、其堂奥に至りては、諸科共に難易の域を越え、科學的の差汰を超出せる至境なりとす。

道釋畫中畫様のものは、元、明の時代既に稀にして、清朝に入りては、此種の畫家殆んど跡を絶ち、僅に錢塘の揚芝等一二人を數へ得るのみ。西湖天竺寺の壁畫觀自在像は、其筆蹟なりしも、既に火災に遭ふて其蹟を存せずといふ。揚芝又人物仙佛鬼神をも善し、筆力雄健縱恣、思慮援筆を假らずして立ちに成す、特に尋丈の大作に長ず、嘗て自ら曰く、若し三十丈の大壁を

得ば、磨墨一缸、大帚を以て之を蘸し、快馬に乗じて之を成せば、庶幾くは手臂方に舒び、心胸以て暢びんかど。然れども、小幅を善せざりしが爲に、其流傳極めて少なりしといふ。其他の道釋畫に至りても、之を前代に比するに、寧遜色あるもの、如し、揚芝の外、徐人龍、董旭、顧升、丁元公、釋弘瑜、呂學、等皆仙佛鬼神人物を善し、魏向、誠身、竝に羅漢に長じ、姚宋、羽の瓜子上の十八羅漢畫も、世稱して絶藝といひき。然れども歴史、風俗の人物畫に至りては、明末に南陳北崔の兩家と稱されたる陳洪綬の、清初に亘りて、斯道第一の妙手と仰がれ、高く仇英の上に在りて、近代人物の冠冕、三百年來この筆墨なしとまで謂はれ、以て清朝に於ける人物畫の開祖となりて、當代の藝苑に一大光彩を添へたるの觀あり。洪綬字は章侯、老蓮と號す。明の崇禎の間、朝廷召して供奉と爲さんとす、就かすして辭し去る。四歳にして既に圖を畫き、婦翁をして驚歎せしめたりといふ、其畫風、軀幹偉岸、衣紋清圓にして細勁、李龍眠、趙子昂、の妙を兼ね、設色は、吳道玄の遺法を得、力量氣局、超拔磊落の風致あり。其子陳字小蓮と、門人王樹穀、嚴嵩、來呂庸

等其遺風を傳ふ。此等諸家の外、明代仇英の亞流と見らるべきものに、柳遇、吳求、吳正の周兼など、最も其名あり。殊に柳遇は精密生動の致ありて、樹石欄廊を布置し、幽花細草を點綴し、玩物器皿に至るまで色々佳妙にして、同郷の徐枚と共に名聲藉甚たり。其他、游士鳳、蔡嘉は國初の好手と稱され、郭崑、王樸は北方に名を揚げ、華胥の水墨は直に李龍眠の座に參すと謂はれ、楊晉、王人の門の山水と共に人物花草を善し、常に王暈に從つて遊び、王暈の圖を作るに當り、凡、人物輿騎馬牛等の畫くべきあれば、皆楊晉に命じて寫さしめたるが如き、禹之鼎の初め藍瑛、兼て人物、遂に一家を成し、其白描は龍眠の舊習を襲はずして、吳道玄の蘭葉法を用ひて、兩類に徹しく脂を用ひて、赭暈の娟々古雅なる。馬相舜、王式、秘戲圖に長じたるが如き、其餘、朱寶占、劉源、金農、黃慎、王鐔、王國愛、葉舟、俞宗禮、吳焜、黃堅、王國材、孟永光、孫克宏、華富、新羅山人等、皆人物士女等を以て名を一時に知らる。中に就き其遺蹟の本邦に傳存せるもの、黃慎、俞宗

禮等の作ありといふ。人物畫中亦別に寫眞の一派ありしが、此派亦種々に別れ、其中明の曾波の流派に屬せるもの最も多く、前述の門人の外清朝に入りては、謝彬、郭鞏、徐易、劉祥開、張琦、張遠、沈紀、顧企等あり。沈韶の高弟徐璋、海陽の徐穎亦其法を傳ふ。此中謝彬、徐璋、顧企、沈韶、高弟徐璋、海陽の徐穎其人物は山水中に點景あり、徐璋は康熙中に内庭に祇候し、都門に於て名聲甚だ重かりき。此派の外別に自ら一家を成せるものに、顧銘、顧見龍あり、顧見龍は康熙の間内庭に祇候たり。而して此兩家の亞流と見るべきものは、沈行、濮黃、鮑嘉、深門、人釋性、俞培、周果、王信等なり。其餘、陸燦、卡久、卡祖、沈王簡、李岸、楊芝、茂、劉九德、夏果、丁阜、以子、戴蒼、陸燦、卡久、卡祖、の能手と稱せらる。又西洋畫の影響を受けて、別に一家の風を成せるものあり。康熙中内庭に入りて供奉となれる焦秉貞の如きは、其最も顯著なるものを描寫するに當り、最も其眞を得たりしかば、名、遠近に聞え、就いて學ぶ

西洋畫の影

もの亦多かりしが如し、冷枚最も著はる。崔鐔亦其法を學び、韓鶴及其門人金玠等亦其風を能くす。蓋し西洋の畫法は、明の時歐洲の人、利瑪竇なるもの來りて南都正陽門の西營中に居り、能く基督教の聖母の一小兒を抱けるを作りて、天主の像と爲し、毎に人に語て曰く、中國、祇能く陽面を畫くのみ、故に凹凸なし。吾國兼て陰陽を畫く、故に四面皆圓滿なり。凡人正面なれば則明にして、側處は即ち暗なり。其暗處を染めて稍々此を黒うす。正明の明なるは顯れて凸なりと。爾來曾波臣の一派、其畫法によりて一機軸を出し、一時隆盛に向ひたるが如きも、其畫風の刻畫様なるより、痛く好古派の爲に排斥せられ、また國風と相容れざるものありしかば、其派の未流漸く俗工の譏りを招くに至れり。然るに清朝、康熙、乾隆の際に至り、國運の發展に伴ひ、こゝにまた洋畫の隆盛を見るに至れり。焦秉貞の如き寫照を以て内庭に召され、其徒また盛なるを致せり。謂ゆる江南畫家の傳法と稱する、淡墨を用ひて先づ五官部位の大體を鈎出し、全く粉彩渲染を以てこれを成すが加き、洋畫の影響を受けたるを知るに足らむ。かの伊太利人朗世寧が、洋

洋畫の復興
江南畫家の傳法
伊太利人朗世寧の畫風

人物畫の新格

上官周

花鳥畫の諸流派

黃氏體派

法より逆に支那風を研究し、其の作品の宛として我馬口漢に類せるなど、皆乾隆の頃なりとす。(挿圖參照されば乾隆勅選の西清硯譜の圖の如きも、全く純粹の洋風なりとす。其他、乾隆帝南巡圖若千卷の内一卷陳列する其の院體緻密の寫眞畫の如きも今に存せり。當時山水畫家の間に、陸鳴の雲間派、藍瑛の武林派等に對して上官周、金古良、古良、子可久、劉伴阮の徒を金陵派と稱したりしが、此等の上官周、金古良などは、寧、人物畫家にして、其畫風、大に洋風を加味し、周の如きは人物畫といひては、清朝三百年間の白眉なりといふべし。其作晚咲堂畫傳の如きは、我菊池容齋の前賢故實の藍本となりしものにして、此種の畫法の代表的作品となすべきが如し。(挿圖參照)

第四節 花鳥及雜畫

清朝の花鳥畫は、幾多の流派行はれ、其中前代の風格を繼紹し、又は其發展に成りしものあり。王石、張雍敬、曹源弘、相文、曹運備、胡毓奇、林良の風等

壁、張若靄等は、何れも前代周之冕等の勾花點葉體を繼紹し、雍正の際に、本邦に渡來して、我國に於ける花鳥畫の發展に資したる沈銓南の畫風も、亦この勾花點葉法の、最も寫生に進みたるものにして、最も巧緻精麗を極む。其餘、前代の陳白陽(寫意派)を祖述せるものに、蔣深、顧卓、閔秀、李因、鮑詩等あり。然れども清朝に於て最も流行を極め、當代に於けるこの科の代表的流派とも視るべきものは、實に王武、惲壽平、蔣廷錫等の純沒骨體なりとす。共に北宋徐崇嗣の沒骨體を祖述するといふと雖も、宋の沒骨體なるものは、本邦に傳存せる北宋の趙昌並に元の錢舜舉等の遺品と稱するものに徴するに、其の法、沒骨と稱するも、骨法の描線全く無きにあらずして、細勾の描線、傳彩の爲に負け、僅に草苔の類に線畫なきに過ぎず。されば宋、元の沒骨體なるものは、黃氏體の勾勒、填彩を専らとせるに比して此名を得たるが如く、設色の如きも石具等を用ひず、好みて水彩の輕淡なるを用ひたるが如し。然るに清朝の沒骨體は、張莘、秋穀、等の遺作に見るも、全く勾勒の細線を用ひざる純沒骨體なることを知るを得べし。蓋し徐、黃及び林良の寫意派など、

渾然融合して周之冕等の勾花點葉體となり、更に發展して純沒骨體となりしものならむ。勾花點葉體はもと黃氏體を以て其根柢となすが故に、此派の最も寫生に進みたる沈南漸等の巧緻精麗の畫風を以て、黃氏體の變化發展の絶藝となすを得べくば、清朝の純沒骨體は、徐氏體を以て根柢となして、諸派の融合に成り、以て徐氏體變化の妙を極めたるものと云ふを得べし。而して此等純沒骨體諸家中、先づ其時習を去りて、この派の一角を建設したるものを呉人、王武字は勤中とす。されば王時敏之を稱して、近代の寫生、率ね畫院の習あるに、獨り勤中、神韻生動、當に妙品中に在るべしと謂ひしほどにて、其畫風の逸筆にして點綴流麗、風致多きは、徐氏體を法としたるものにて、學者多く之を宗とし、黃筌一派遂に少しと傳へらる。其徒に張畫、周禮等あり、然れども此派の大成者、建設者となり、天下の藝苑を傾けたるを武進の惲壽平とす。壽平字は正叔、南田と號す。初め好みて山水を畫き復古を以て志となす。虞山の王翬の山水を見るに及んで、自ら其右に出づる能はざるを思ひ、王翬に謂つて曰く、斯の道、兄の獨歩に讓る、余妄りに天下

の第二手と爲るを耻づと。遂に山水を棄て、花卉を學び、古今を斟酌して北
 宋の徐崇嗣に歸す。かくて時習を一洗し生面を獨開して、寫生の正派と目せ
 られ、海内の學者皆其風化を受け、忽ち天下に行はれて、遂に常洲派の稱あ
 るに至れり。其寫生、簡潔精確、賦色明麗にして、天機物趣畢く毫端に集ま
 り、又詩書を能くせしかば、題する所の詩句清艶にして、書法河南三昧を得
 ると謂はる。其衣鉢を傳へて一時に名ありしもの、張子畏、朱繡、馬扶
 義、鮑楷、邵會復、吳生、習忍、渾壽平、等あり。然れども其末流に至りては
 徒らに其描摹を事とせしにや、小山、那桂、小山、書畫の著ありの云ふ所によれば、
 後、壽平を學ぶもの、其意を師とせずして専ら描摹を事とし、以て枝幹分た
 す、苞蒂備らず、眞意盡く失せて尙賈歎を爲して世を欺くといへり。
 當時常熟に蔣廷錫、南沙と號すあり、名聲甚だ高く其畫品、南田に均く、直に
 元人の席を奪ふと謂はれ、士大夫其筆墨を雅尙して模楷を爲すもの多かりき。
 其法を傳ふるもの亦多く、鄒元斗、供本、錢元昌、李蟬、湯祖祥、等其名最も
 聞ゆ。蓋し性、恬雅にして士を愛し、凡、才藝の觀るべきあれば皆門下に羅

致して指授し、以て各々其材を成さしめしかば、随つて其賈本も多しといふ。
 其中、李蟬の如きは胡毓奇、許慧等と共に林良の寫意畫をも能くし、儀眞の
 陳撰と其名伯仲せりといふ。
 此等諸家の外、鄒一桂、小山と號す、雅正は南田後僅に見る所と謂はれ、華亭
 の瞿潛は其水墨を望むに五彩の如く、冷雋清冰、易元吉の規範ありと稱され
 て、其名最も著はる。更に文定、文待詔は王勤中と名を齊うし、朱雲輝は其名
 荆楚の間に聞え、姜恭壽は瀟灑の筆を以て同郷の史鳴泉と相上下し、杜曙
 の水墨花草、亦梁、宋の間に聞え、吳應貞及文倣の二女史は、實に閨秀の粹
 たり。其他山陰の姜廷幹、華亭の陳舒及童原等また一時の撰たり、
 之を要するに清朝の花鳥畫は、其他の諸科に比するに、比較的成功的結果
 を現代に齎したるが如く、支那藝苑の、嘉慶以降國運の漸く傾けると共に、
 畫道も亦漸く衰運に趣き、最近の世に至りては、斯道頗る寂寞を極め、其氣
 韻、技工の稱揚すべきもの殆んど稀なるにも拘らず、尙、其花鳥の科は、
 能く其妙技を發揮し、寫生を重んずる近代人の雅賞にも入りて、支那繪畫の

日本現代の
花鳥畫
秋毅

墨戲

命脈を維持し得たるが如し。蓋し最近の世に至り、特に花鳥畫の妙技を傳へて、其技西歐の間に於ても喧傳せられ、最近の支那繪畫に於て、恰も萬綠叢中紅一點の觀あらしめたるもの、實に前述の常洲派等の餘響ならずんばあらず。且つ又本邦現代の繪畫に於て特に花鳥の勝れたるも、一に南嶺、秋毅等の賚に依るといふも過言にあらざるべし。南嶺の日本花鳥畫に影響を及ぼしたること前述の如く、秋毅は我天明中、本邦に來遊したる常洲派の能手にして、徐氏體の最も寫生に進みたる清國々初の風格を傳へたるものにして、熊斐、宋紫石、柳里恭等先づ其風格を傳へ、遂に本邦寫生家の泰斗應舉によりて大成せらるゝに至れり、蓋し應舉の爛眼早く其長所を取り、轉化して以て自己の機軸を成したりといふべく、謂ゆる圓山派の格法は、南宗山水と常洲派花鳥との渾融に出でたるものか。

更に清朝に於ける文士の墨戲、翰墨中の散枝とも稱すべきものを見るに、墨竹家には錢塘の魯得之、字孔巖、先づ吳仲圭を法とし、兼て文同及蘇東坡を追跡し、李日華の爲に翰墨中の精猛の將と謂はれ、次いで仁和の諸昇、山陰の

指畫の蔣派

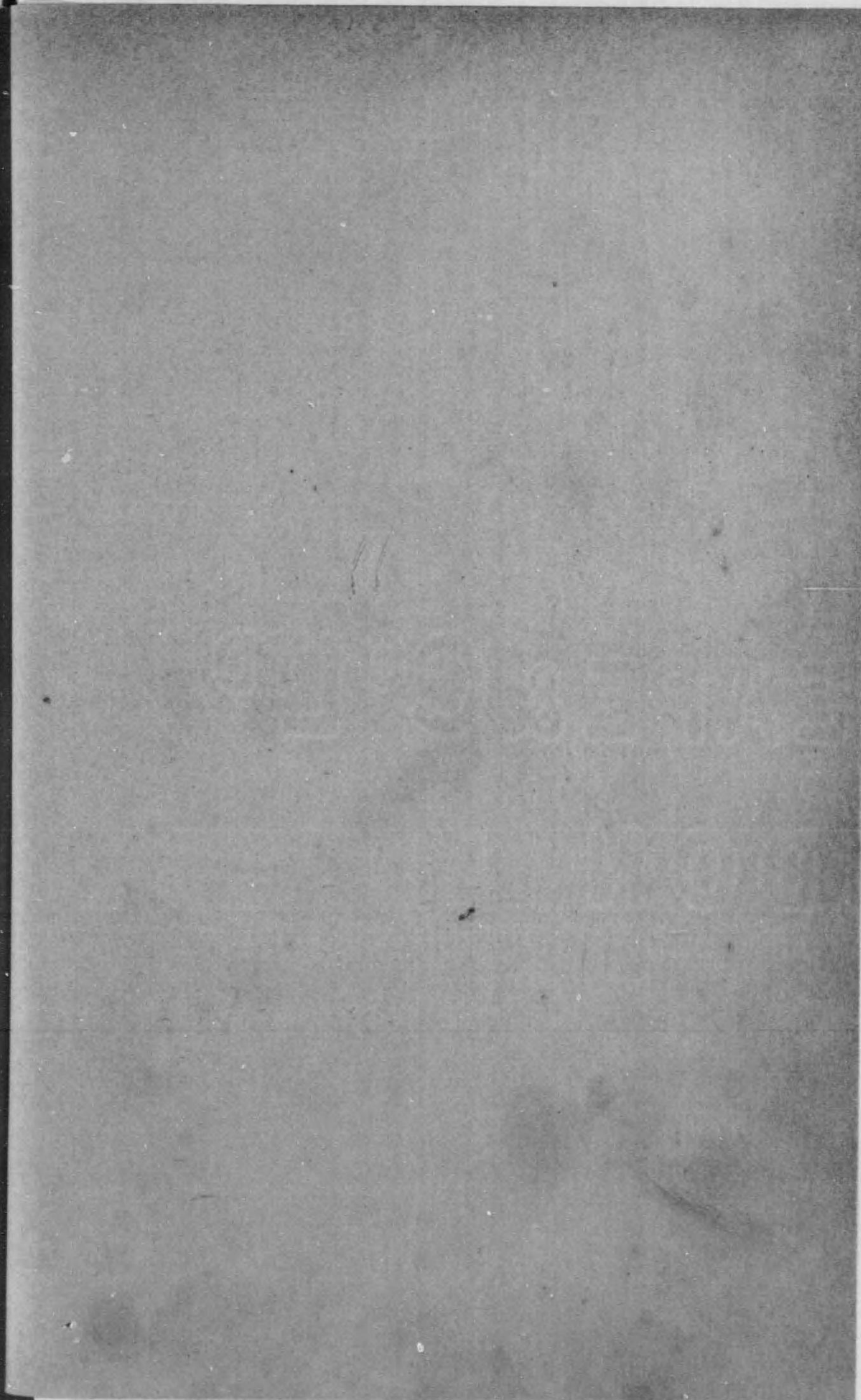
王、及、萬、其、藩、陳、一元、吳、秋、聲、等、其、名、高、く、諸、昇、號、日、如、の、弟子、に、阮、年、あり。錢、塘、の、俞、俊、亦、其、法、を、紹、ぎ、出、藍、の、稱、あり。又、墨、竹、と、共、に、墨、梅、を、善、せる、もの、には、朱、奎、張、風、金、俊、明、李、琪、枝、張、乙、僧、金、勳、汪、士、慎、許、友、等、あり。中に就き朱奎の弟子に萬介あり、馬頤亦其風格を得といふ。更に墨蘭に於て名を得たるものを、江都の文命時及び閻秀顧媚等となす。其餘、楊維聰、呂佐は畫魚を以て、周琦は畫龍を以て其名聞え、尹小楚は畫驢に妙を得、人呼んで尹畫驢と稱し、高旦園、高其佩、朱論、許振武、王德晉、蔣璋等亦指頭畫に於て名あり。其中、蔣璋の後を指畫の蔣派といふ。

然れども此等の墨戲なるものも、漸次、流弊に陥りたるが如く、其素人畫なるものも却つて素人らしからざるものとなり、其風流氣韻の畫外に注溢するもの稀なるに至れり。されば徐沁も亦元、明この方、作者寔盛にして、乃ち史を爲り譜を爲し、其法益々詳にして其流れ益々敝れぬ、名家と雖も氣條を以て嘲りを取るを免れず、況んや其より下れるものをやといへり。

支那繪畫史

110*

支那繪畫史終



九

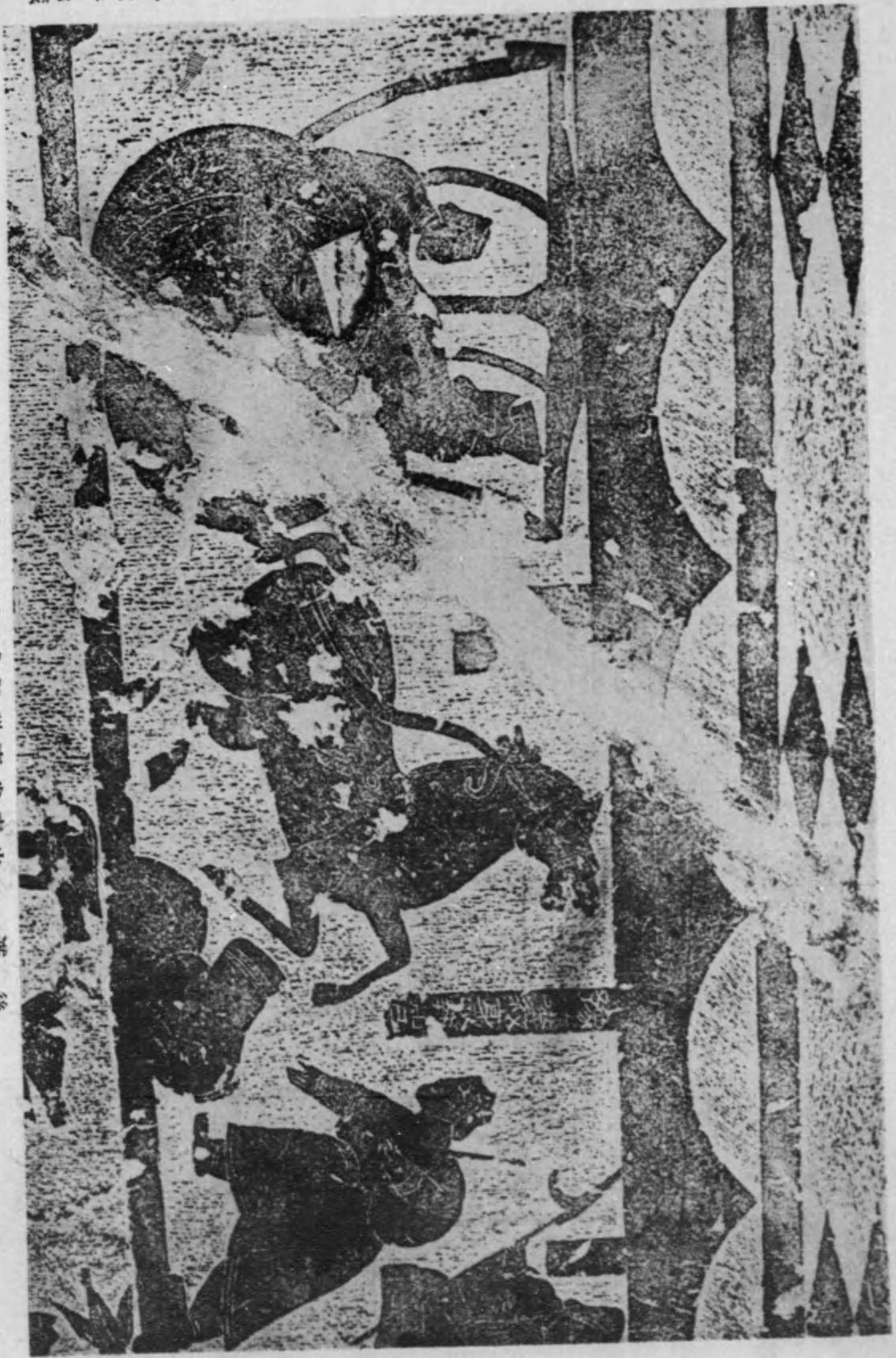
周夔鳳壺紋



十一

周夔鳳尊

周 代 夔 鳳 紋



拓本 中村不折氏藏

後漢 山東省嘉祥縣武梁祠刻石 第一部



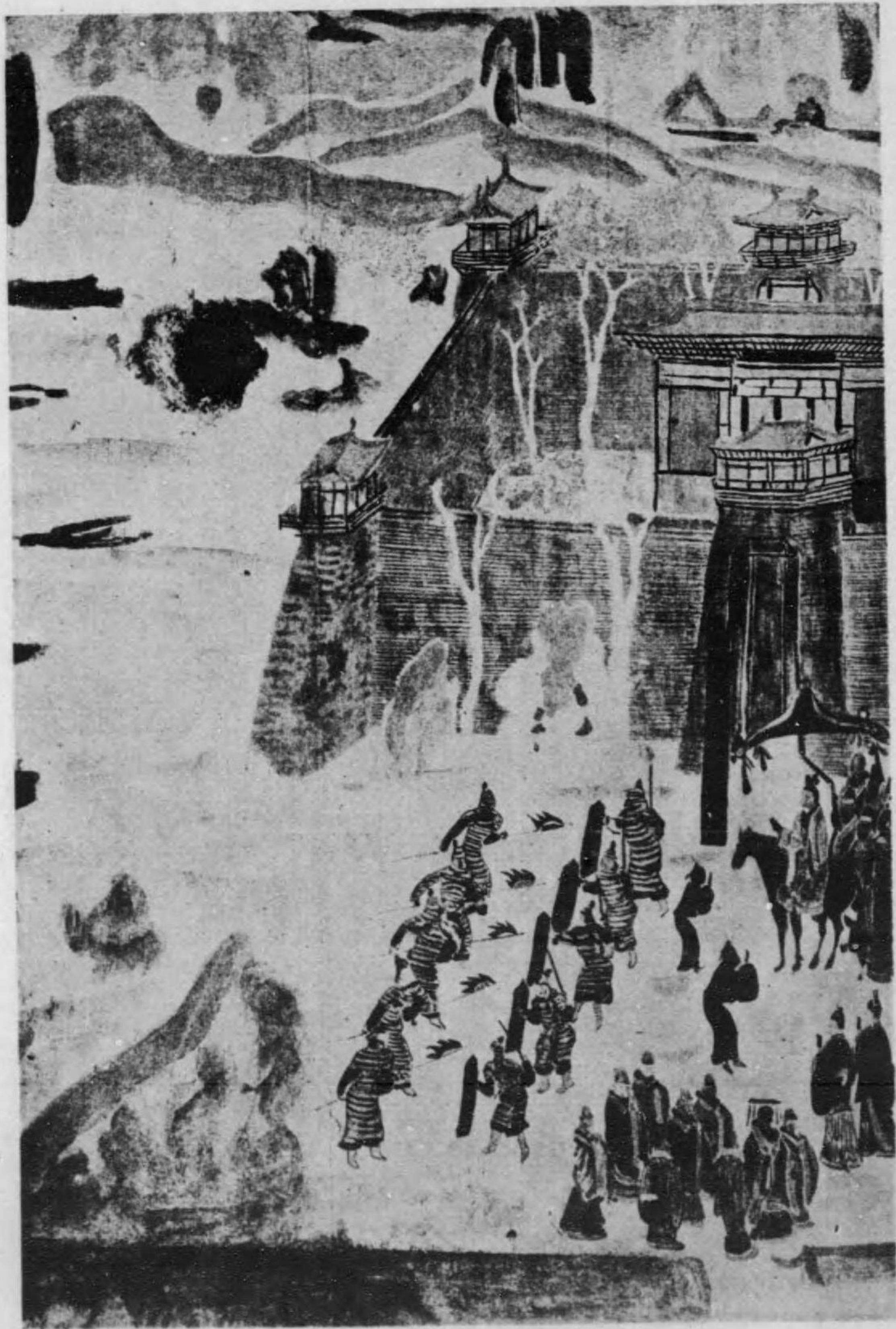
拓本
中村不折氏藏

一ノ中石刻山門龍 朝六



英國
博物館藏

圖姬庶告敢箴司史女 之愷順 朝六



太子求佛圖 敦煌石室壁畫 唐朝



清國
陶齋尙書藏

唐尉遲乙僧天皇帝像



舊金澤
稱名寺藏

一ノ漢羅六十 師大月禪代五



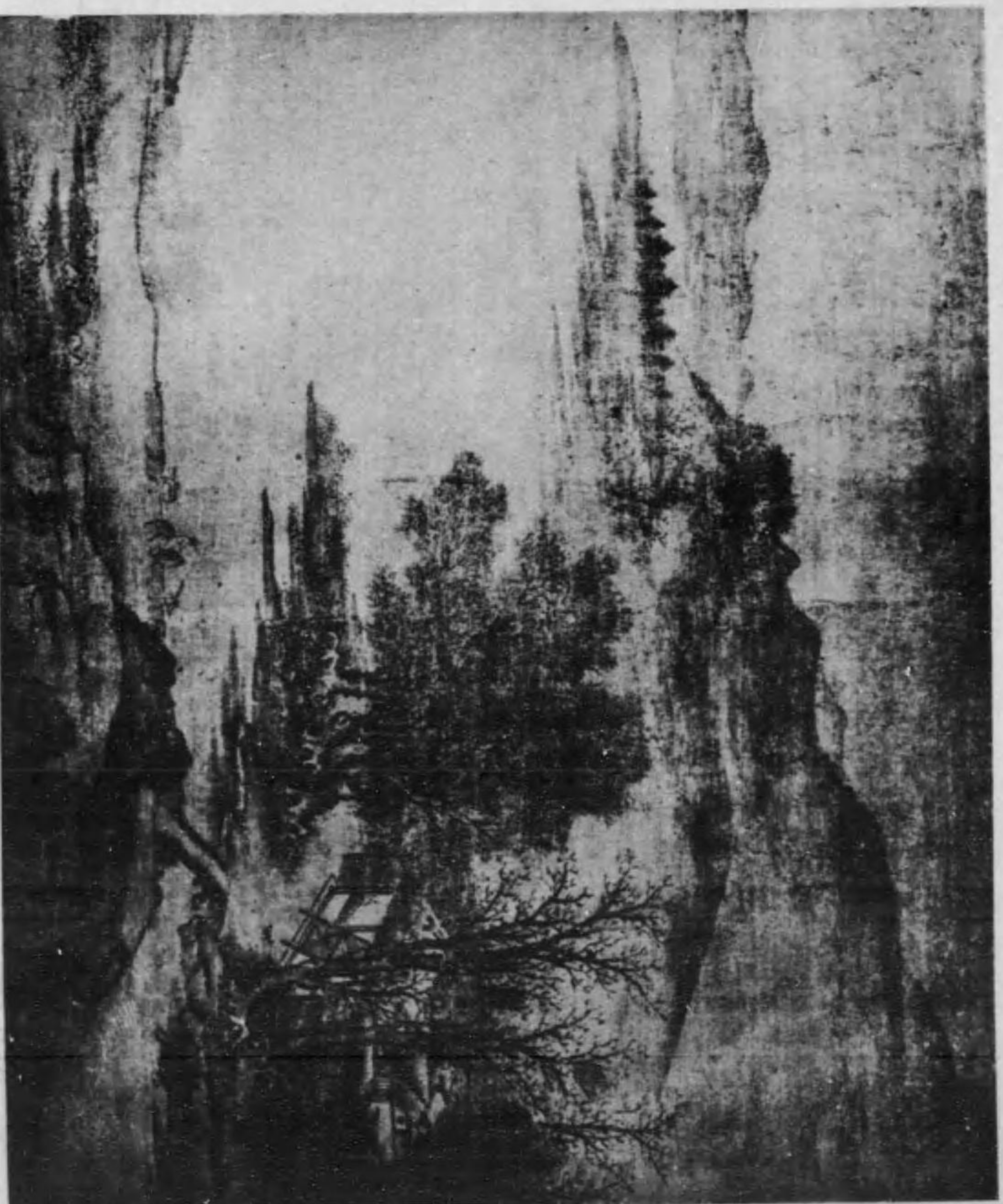
伯雷
柳澤保惠氏藏

圖鷺白柳雪 照徐代五



東京
美術學校藏

宋李龍眠阿羅漢圖



赤星鐵馬氏藏

宋趙大年歸去來圖

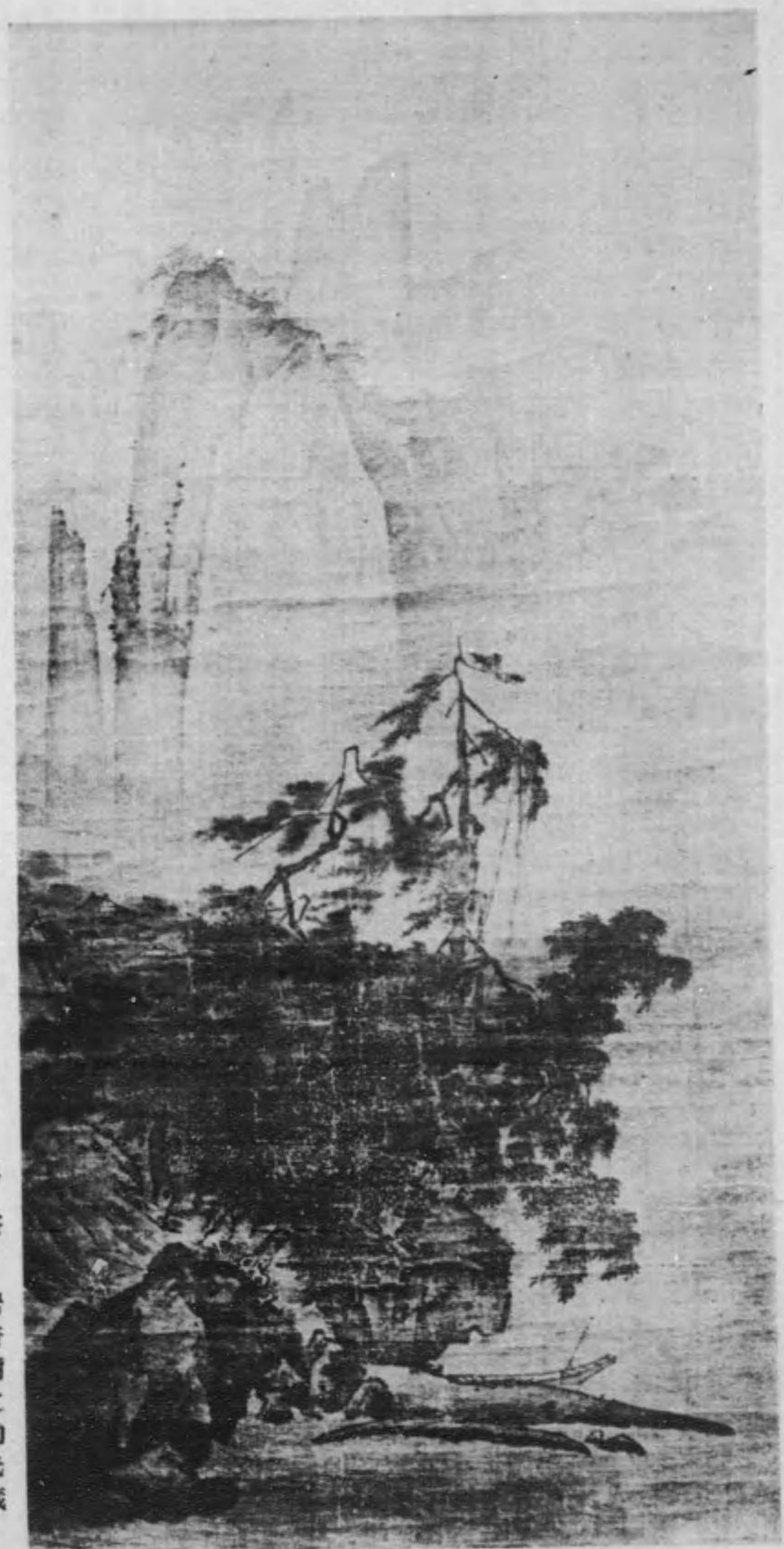


京都
金地院藏

宋徽宗皇帝 秋冬山水圖



宋米元章雲山圖



男爵
岩崎彌之助氏藏

宋馬遠 雨中山中水圖



男爵 岩崎彌之助氏藏

宋夏圭 江頭泊舟圖



京都
大德寺藏

宋牧谿觀音圖



伯爵 伊達宗基氏藏

宋梁楷 善化和尚圖

目擊甲以電波瑞
 橫路以風迅發龍顏
 而孤起日風聲以健
 峻耳并達而女步
 闕閣下而輕實依寫
 群向不斯接秋後以
 揚顏 摹景湯筆作

高克恭



至正二年仲冬日
 子昂



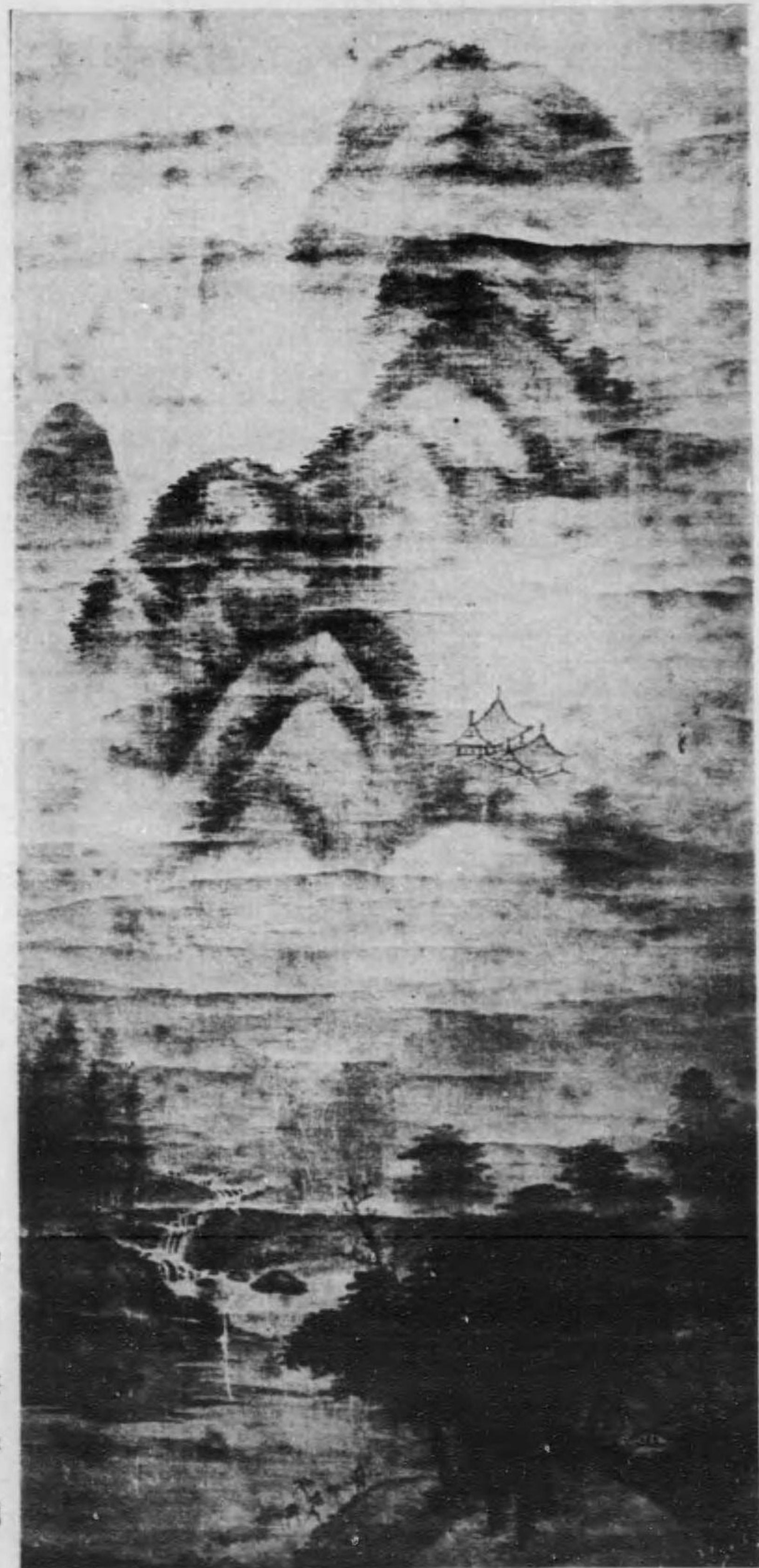
清國沈氏所藏

記題山房高及馬畫 昂子趙ノ元



京都 智恩寺藏

元 顔輝 鐵拐仙人圖



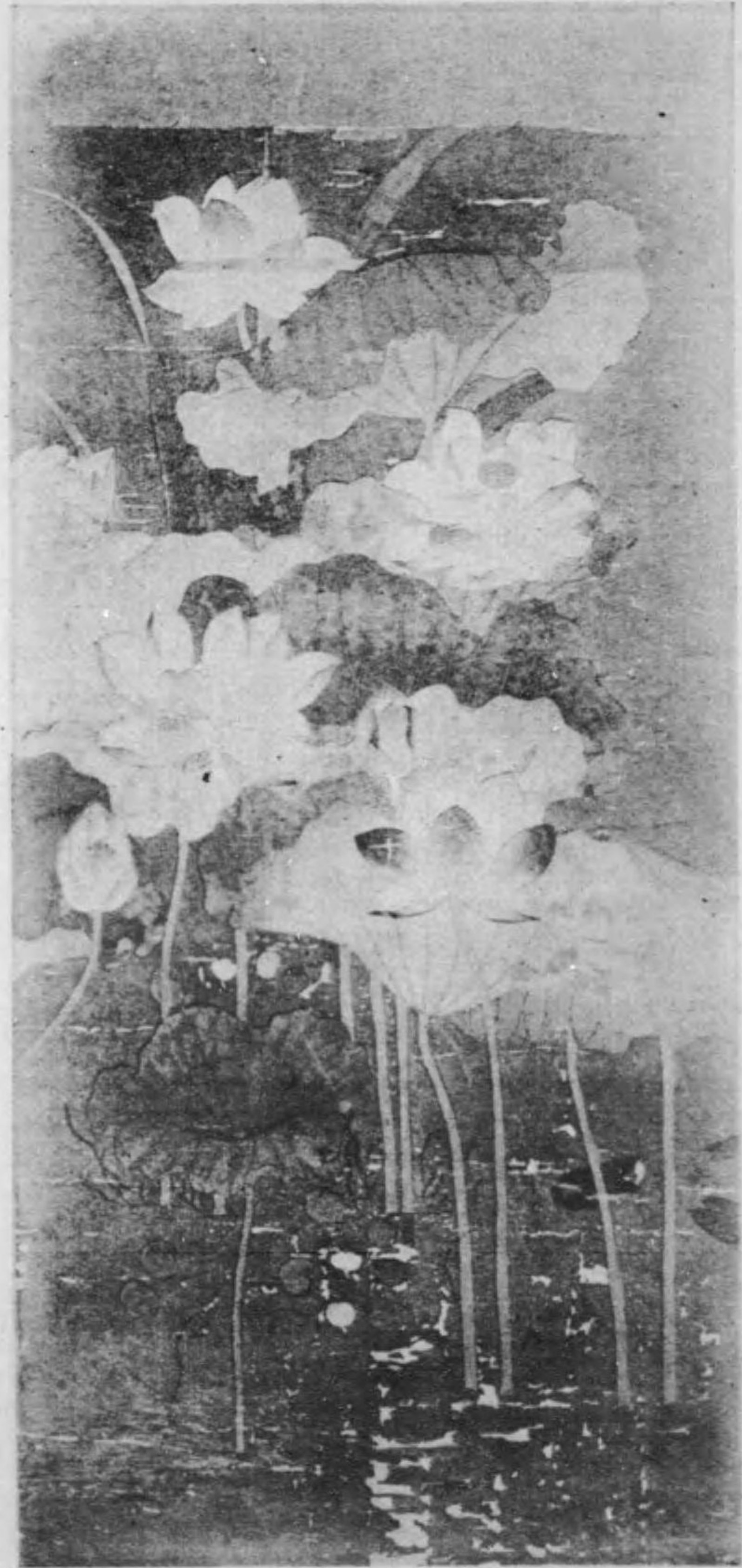
馬田侯爵藏

元高然暉 雲山圖



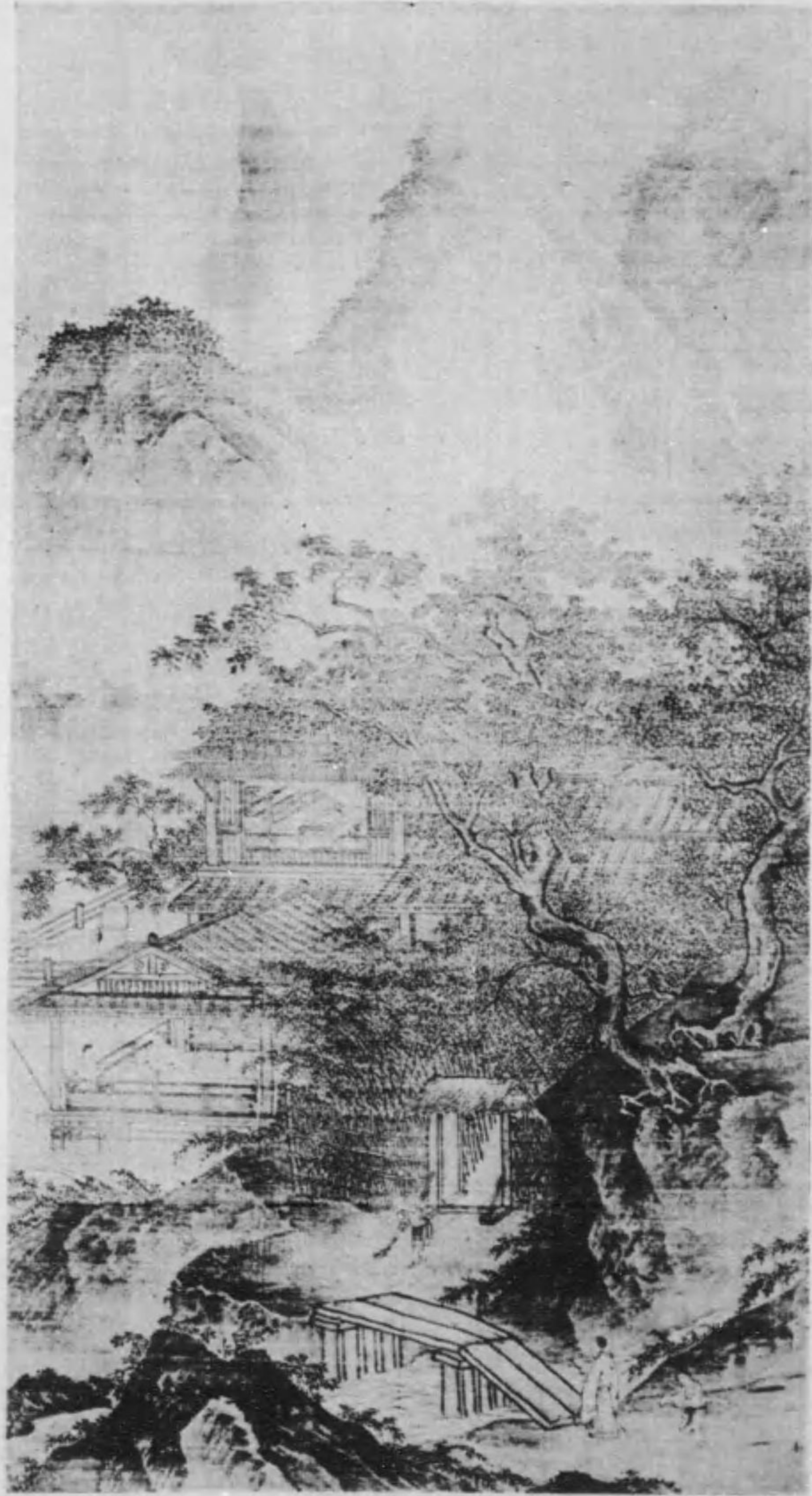
清國
陶齋
尙書
藏

圖居移川稚葛 蒙王元



京都
本法寺
藏

元錢舜舉蓮花圖



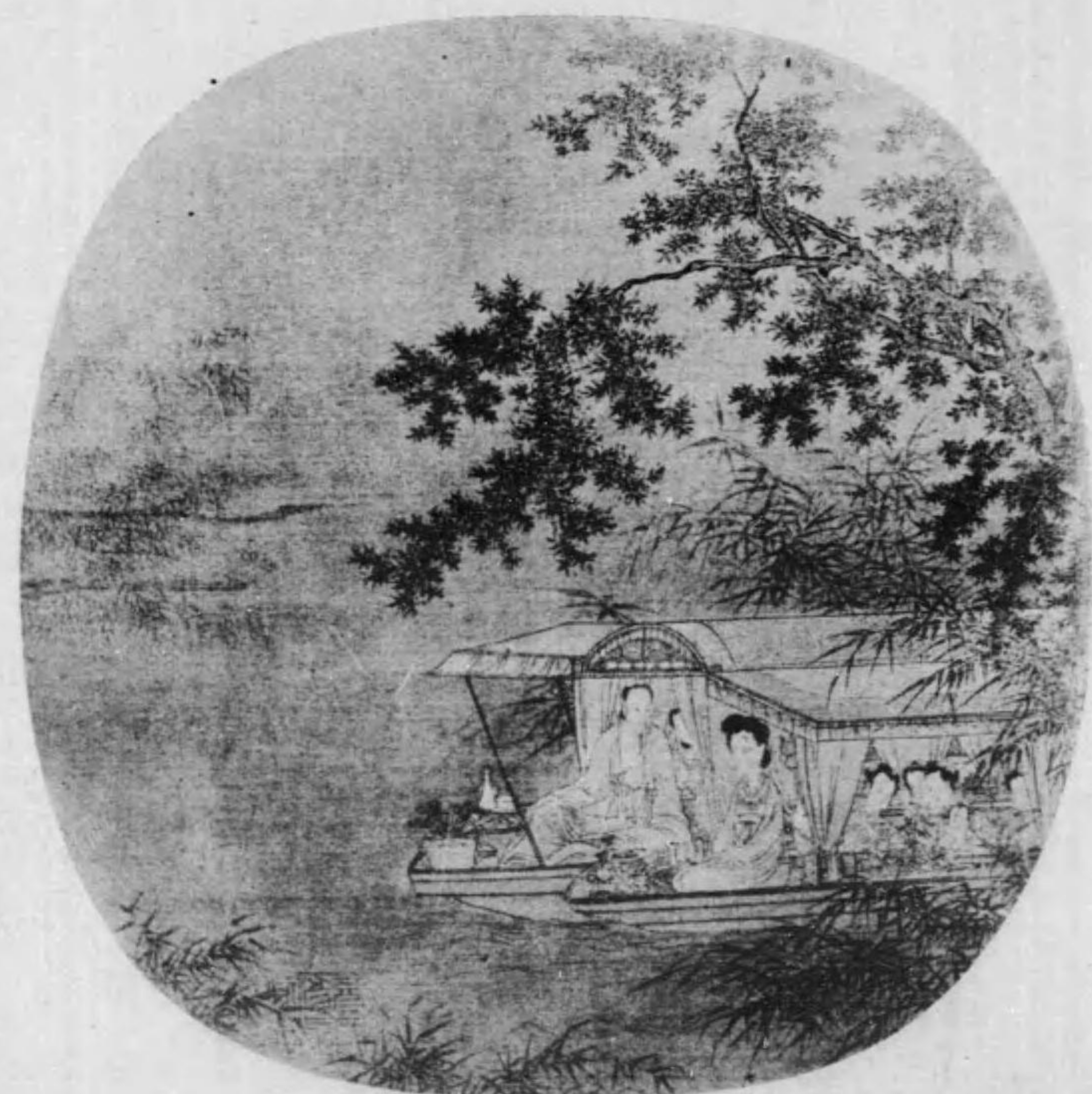
德川伯爵藏

水 山 進文戴明



藏氏城總名桑

水 山 臣 周 明



明仇英 春江遊舟圖
黑田侯爵藏



一
第
一
次
全
國
美
術
展
覽
會
上
展
出
之
畫
作
之
一
也
清
湖
畫
於
長
沙

明 徵 文 明



題御隆乾及圖泉流竹修 如六唐ノ明



清王石谷雪景图

藏民折不村中



清國 胡劭菴參議藏

清 朝 歐 人 則 世 寧 松 林 虎 嘯 圖

蕢學鄉

前漢書贊云孔子稱志士
仁人有殺身以成仁無求生
以害仁便於四方不辱君命
蘇武有之矣



周官上清 蘇武牧羊圖

人名索引

ア

二四六

阿加々

一八六

禹之鼎

一一八

イ

六〇

殷仲容

一九二

圓次平

一一七

殷開禮

六〇

惲南田(惲壽平ヲ見ヨ)

二〇〇、二〇〇、二〇〇、二〇二

圓仲

一一八

尹彬

六〇

惲壽平

二〇〇、二〇〇、二〇〇、二〇二

圓次平

一一七

易元吉

二二九

衛協

二四、二六、二七

葉大年

一七六

尹白祖

一三三

袁倩

三二

葉欣

一八一

允文

一四〇

衛夫人

四四

袁江

一八二

因陀羅

一四六

袁昂

四四、四九

袁祖

一八八

尤求

一六二、一七〇

關毗

四八、四九

葉有年

一九一

殷宏

一七五

關立德

四九、五六、五七

袁慰祖

一九二

伊字九

一九二

關立木

四九、五七、五八

溫儀

一九〇

逸然

一九二

燕筠

九六

翁嵩年

一九二

游士鳳

一九六

燕文貴

一一〇

應舉

一〇四

尹小楚

二〇五

燕蕭

一一四

人名索引

二

幹非子	一〇	高克明	一〇九、一一〇、一一一	高棟	一六四、一七四
桓範	二二	江參	一一一、一二〇、一二一	夏仲昭	一六四、一七四
郝騫	三七	高克恭	一一一、一二〇、一二一	乾旭	一七五
迦佛陀	四一	高房山(高克恭ヲ見ヨ)	一一五、一二四	項元沐	一七六
解倩	四四	高嗣昌	一一七	夏昶(夏仲昭ヲ見ヨ)	
江僧寶	四四	夏森	一一七	韓秀實	一七八
高孝衍	四五	高益	一一九	賀金昆	一八二
江志	五〇	高懋節	一二〇	耕烟外史(王翬ヲ見ヨ)	
漢王元昌	五六	高元亨	一二〇	高翔	一九〇
漢王元嘉	五六	賈師古	一二三	高岑	一九一
韓幹	七四、七五、七六	高從遇	一二五	何文煊	一九一
項容處士	七九	高懷寶	一二五	赫頤	一九二
韓滉	八二	艾宣	一三〇	高鳳閣	一九二
高冲古	八八	曷守昌	一三〇	高且圖	二〇五
高太仲	八九	覺範	一三三	高其佩	二〇五
高道興	九〇	管夫人	一四〇		
夏候延	九二、一二七	高然輝	一四一		
乾虬	九六	柯九思	一四二		
高文進	一〇一、一二〇、一二五	顏輝	一四五		
賀眞	一〇二	何澄	一六一		
夏珪	一〇七、一一六、一九九	夏嗣	一六四		

吉底俱	四一	金明吉	一九〇	郭嗣	一五二
徽宗皇帝	九八、一〇二、一〇三	魏成	一九〇	黃蒙	一六四
許道寧	一〇九	魏賢	一九一	黃鶴山樵(王蒙ヲ見ヨ)	
玉潤	一一二、一一八	魏向	二〇三	黃克暉	一六六
龔開	一一八、一二四	姜廷餘	二〇三	關思	一六六
丘慶餘	一二九	姜恭壽	二〇三	魏果	一七五
季衡	一三三			黃輪	一七五
金鉉	一六四			黃震	一七六
魏之璞	一六六			黃鼎	一九〇
魏之瑛	一六六			黃尊古(黃鼎ヲ見ヨ)	
許至實	一六九			華銀	一九〇
仇實父(仇英ヲ見ヨ)				黃愷	一九六
仇十洲(仇英ヲ見ヨ)				華岳	一九六
仇完	一七〇			郭榮	一九七
姜隱	一七〇			虞沅	一九七
金穀生	一七二			郭若虛	一九九
許伯明	一七六			黃子久	二〇三
許通	一七八			黃公望(黃子久ヲ見ヨ)	
龔振	一八六			黃一峰(黃子久ヲ見ヨ)	
金堅學	一八八			郭純	一五二

元帝	二一、二〇〇	顧駿之	三三	顧雲仍	一七二
荆浩	九三、九四	弘景	四四	吳枝	一七六
月蓬	一一一	顧野王	四五	顧見龍	一八七
彦徵	一四〇	吳道子(吳道玄子見ヨ)	四四	顧星	一八六
倪雲林	一四四	孔榮	七四	胡眉	一八六
月湖	一四六	顧生	七九	胡訥	一八六
倪端	一五三、一六九	顧閔中	八九	洪都	一八六
刑國賢	一六〇	顧亮	一一〇	吳歷	一八八
阮福	一六九	候翼	一二〇	顧卓	一八八
計禮	一七五	吳元瑜	一三〇	胡竹君	一八八、二〇〇
奚岡	一九〇	吳炳	一三一	吳應枚	一九〇
嚴湛	一九五	吳仲圭	一四四	吳振武	一九〇
阮年	二〇五	顧應文	一五三、一六九	胡節	一九〇
		吳偉	一五三、一五八、一六〇	黑壽	一九一
		吳小仙(吳偉子見ヨ)	一五三	吳安	一九一
吳道玄	四、六一、六二、六三、六四	剛翁	一五四	胡造	一九一
	六五、七六、七八	顧炳	一五四	顧昉	一九二
公輸班	一〇	候鉞	一五四	顧大中	一九二
顧寶克	三二	貢昌言	一六六	顧約文	一九二
吳暉	三三	胡隆	一六九	渾木初	一九二
顧景秀	三三	吳廷羽	一六九	吳偉業	一九二

サ

吳梅村(吳偉業子見ヨ)	一九五	曹霸	七四	謝赫	三二、二七三、四
顧升	一九五	齊皎	七九	上官周	五、一七〇、一七一、一七二
吳求	一九五	左全	八〇	史皇	一九九
吳正	一九五	曹仲天	八九	諸葛亮	二二
吳愷	一九六	左禮	九六	徐邈	二二
顧企	一九七	崔愨	一三〇	史道碩	二六、七五
顧銘	一九七	蔡山	一四六	荀勗	二六
胡毓奇	一九九、二〇三	相禮	一五二	史道碩	二六
吳生	二〇二	莊心賢	一五四	蔣少遊	三三
吳應貞	二〇三	曹履吉	一六六	謝莊	三三
吳秋聲	二〇五	崔子忠	一七〇	章繼伯	三六
吳振武	二〇五	曹文炳	一七四	車道改	三五
		曹培源	一九〇	史乘	三五
		查士標	一九〇	朱審	七五
		曹岳	一九二	周肪	七九
蔡邕	一七〇、一八	莊罔生	一九二	常榮	八〇、八一
曹髦	二二三	蔡澤	一九二	周文矩	八一、八八、八九
曹弗興	二二三、二四	蔡嘉	一九六	朱澄	八八
曹不興(曹弗興子見ヨ)	三二、四〇、六	崔鑄	一九八	徐崇嗣	八八、九〇、二七
曹仲達	六〇	曹源弘	一九九		
曹元廓	六四、一三〇	小山(鄒一桂子見ヨ)			
崔白					

徐熙	八九、九〇	商喜	一五三	蔣嵩	一六七
徐崇勳	九〇	周文清	一五三、一六一	申抑南	一六七
徐崇矩	九〇	鍾欽禮	一五四、一五九	上官	一六七
徐德	九二	朱端	一五四	蔣子誠	一六八
鍾隱	九六	朱佐	一五六、一六三	周行山	一六九
朱縣	九六	周臣		朱生	一七〇
升夢松	一〇一	周東村(周臣子見目)		心越	一七〇
仁宗皇帝	一〇一	朱侃	一五八	朱承爵	一七三
朱銳	一一〇	章瑾	一五八	周之冕	一七四
釋巨然	一一一、一一二	周鼎	一五八	周少谷(周之冕子見目)	一七五
釋惠崇	一一二	蕭嵩	一六〇	周裕度	一七六
朱敦倫	一一八	蕭貴	一六〇	朱統銀	一七六
釋法常	一二一	謝晉	一六一	釋可浩	一七八
釋子溫	一二一	周延旌	一六一	手舜耕	一七八
釋梵隱	一二三	朱綸	一六三	徐璋	一八一
周季常	一二三	徐賁	一六四	釋成衡	一八一
淳熙	一三一	徐渭	一六六	釋覆千	一八二
松雪道人(趙子昂子見目)	一四三、一四五	周天球	一六六	謝松洲	一八二
朱澤民	一五二、一五五、一六四	朱多炆	一六六	上睿	一八八
周位	一五三、一五五	謝時臣	一六六	徐溶	一八八
謝環		釋大樹	一六七	清閻	一九〇

釋弘仁	一九〇	徐易	一九七	鄒元斗	一八一、二〇〇、二〇二
祝昌	一九〇	徐穎	一九七	鄒詰	一九一
蕭雲從	一九〇	周果	一九七	鄒一桂	二〇二、二〇三
釋石莊	一九一	司馬口漢	一九九		
謝赫	一九一	蔣深	二〇〇		
釋道濟	一九二	蔣廷錫	二〇〇		
釋髡殘	一九二	秋谷(張辛子見目)	二〇〇		
周之夔	一九二	秋穀(張辛子見目)	二〇〇		
周鼎	一九二	周禮	二〇一		
釋成開	一九二	朱穉	二〇〇		
章氏	一九二	習忍	二〇二		
章谷	一九二	朱雲輝	二〇三		
紫慎	一九二	史鳴皋	二〇三		
徐人龍	一九五	諸昇	二〇四		
釋弘瑜	一九五	朱奎	二〇五		
周兼	一九六	蔣璋	二〇五		
徐枚	一九六	周璋	二〇五		
朱寶占	一九六				
新羅山人(華嵩子見目)					
徐障	一九七				
謝彬	一九七				

ス

七

邵南	一五九	石谷 (王蒙子見ヨ)	一六〇
錢貫	一六三	宋登春	一六〇
蕭琛	一六三	宋旭	一六六、一六八
石田先生 (沈周子見ヨ)	一六三	宋懋晉	一六六
錢穀	一六六	曾波臣 (曾鯨子見ヨ)	一六六
雪艇	一六六	曾鯨	一七一、一七二
屠景鳳	一六六	楚祚	一七四
盛茂燁	一六六	楚善	一七四
邵彌	一六六	楚芳	一七四
邵張蘊	一六六	孫克宏	一七四、一七九
薛仁	一六九	孫從吉	一七六
誠意	一七〇	孫梅花 (孫從吉子見ヨ)	一七八
錢永	一七四	蘇駿業	一八六
邵節	一七四	孫逸	一九〇
盛時泰	一七七	宋石門	一九一
焦乘貞	一七八	孫杖	一九九
石頭陀 (藍瑛子見ヨ)	一八九	戴逵	二〇二
誠身	一九五		
正叔 (檀壽平子見ヨ)	二〇二		
邵曾復	二〇二		
錢元昌	二〇二		

夕

二六、二七、二九、三二

戴勃	二九	張彥遠	一一、八五	竹慶	八〇
戴則	二九	陳敞	一五	張登	八一
雷寶鈞	四四	竺法	一六	陳庶	八二
談皎	六五	張衡	一七	陳格	八二
刀光胤	七九、八二	張墨	二六	竹夢松	八九
戴嵩	八二	長康 (顧愷之子見ヨ)	三六	張政	九〇
戴暉	八二	沈標	三六	張忠義	九一
檀知敏	一一三	沈榮	三六	張浹	一一〇
戴文璣	一一三	張僧繇	三八、四一、四三	陳用者	一一〇、一一〇
湯正仲	一三三	張善果	四四	張敦禮	一一六
唐棣	一四〇	張儒童	四四	張師義	一一八
唐子華	一四三	長善見	四九	張元簡	一一三
大知道人 (黃子久子見ヨ)	一四三	長老師	六〇	陳宗訓	一一三
湯祖祥	二〇二	長藏	六四	陳常	一二九、一二三
戴璣 (戴文璣子見ヨ)	二〇二	張璩	七三、七四	陳琳	一三九
段衝	一七〇	張閔	七四、七六	陳仲仁	一三九
戴蒼	一九七	陳寧	七九	張遜	一四二
		陳皓	八〇	沈希遠	一五〇、一五八
		張南本	八〇	陳遠	一五二
陳洪綬	五、一七〇、一九五	重胤	八〇	陳遇	一五二、一五八

子

張煥	陳言	陳禎	沈頌	張復陽	張路	張平山	張有聲	沈昭	陳觀	張觀	陳繼儒	沈周	陳鶴	沈應山	沈舟	張紀	沈政	張乾	陳攜
一六一	一六一	一六一	一六一	一六一	一六一	一六一	一六一	一五九	一五八	一五八	一五八	一五八、一六五、一七四	一五八、一六七	一五四	一五四	一五三	一五三	一五二	一五二
陳序	陳天定	陳道復(陳淳子見ヨ)	陳子和	張子游	張玉珂	沈爾訓	沈完	張仙童	張瑞圖	張潤甫	張維	項雪謨	陳淳	沈啓南(沈周子見ヨ)	沈貞	沈恒	陳珪	陳汝言	張羽
一七六	一七六	一七五	一七三	一七二	一七二	一七二	一七〇	一六九	一六六	一六六	一六六	一六六、一七五	一六四	一六四	一六四	一六四	一六四	一六四	一六四
沈南蘋(沈誥子見ヨ)	沈誥	張若靄	遲儒	張雍敬	沈行	沈紀	陳小蓮(陳字子見ヨ)	陳字	陳章候(陳洪授子見ヨ)	陳老蓮(陳洪授子見ヨ)	沈芥舟(沈宗憲子見ヨ)	沈宗憲	陳延	張棟	陳璵	張宗蒼	陳枚	張德輝	陳子野(陳序子見ヨ)
二〇〇、二〇一、二〇四	二〇〇	一九九	一九九	一九七	一九七	一九五	一九五	一九二	一九二	一九二	一九〇	一八六	一八二	一八二	一七八	一七八	一七八	一七八	一〇

子

張辛	張畫	張子畏	陳撰	陳野	陳一元	通證	趙岐	趙夫人	田僧亮	展子虔	鄭法士	鄭法文	鄭法文	鄭法文	鄭法文	鄭法文	趙令穰				
二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇三	二〇三	二〇五	一八八	一七	二四、二五	六四	四七、四八、四九	四八、四九、九五	四九	四九	四九	六四	六四	六九、七一、七三				
趙孟頫(趙子昂子見ヨ)	趙子昂	趙公祐	趙博文	趙幹	趙天穗	趙弘	傅古	聖院深	趙元真	趙光輔	趙然	趙然	趙昌	趙德齊	丁昞	趙大年(趙令穰子見ヨ)	趙伯駒	趙千里(趙伯駒子見ヨ)	趙伯驥	鄭思南	
七六、一四〇	八〇、八〇	八一	八九	九〇	九二	九五	九二	九〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇
鄭松雪(趙子昂子見ヨ)	鄭文敏(趙子昂子見ヨ)	趙仲穆	趙瑋	趙原	趙麟	鄭顯山	程嘉燧	趙左	丁雲鵬	程環	程清	趙曉	趙文度	程正葵	傅山	程雲	丁元公	趙之璧			
一四〇	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六	一四六

陶弘景	四四	唐六如(唐寅ヲ見ヨ)	一五六、一六三	南沙(蔣廷錫ヲ見ヨ)	一三八
董伯仁	四七、四八、一一三	唐子畏(唐寅ヲ見ヨ)	一五八、一六七、一八四	南嶺(沈誥ヲ見ヨ)	一六三
曇摩拙叉	五〇	董其昌	一八五、一八五、一八五	南田(惲壽平ヲ見ヨ)	一七八
董源	八八、一〇一	董思伯(董其昌ヲ見ヨ)	一八五		
唐希雅	八九、九〇	董玄宰(董其昌ヲ見ヨ)	一六〇		
唐中祚	九〇	鄧文明	一六四		
唐宿	九〇	杜用嘉	一六四		
杜齡	九〇	杜瓊	一七〇		
杜齡	九〇	杜陵內史	一七〇		
勝昌祐	九〇	陶成	一七二		
道芬(僧道芬ヲ見ヨ)	九〇、九二	唐宗祚	一七二		
杜霄	九六	童佩	一七四		
董羽	一〇一、一〇三	唐岱	一八九		
董仁益	一一〇	唐俊	一八九		
東坡(蘇東坡ヲ見ヨ)	一一〇	董旭	一九二		
鄧椿	一三四	杜曙	一九二		
杜董	一三四	童原	二〇三		
唐伯虎(唐寅ヲ見ヨ)	一五四				

法明(僧法明ヲ見ヨ)

法明(僧法明ヲ見ヨ)	一一二、一三〇	馬昂	一九二	文同(文與可ヲ見ヨ)	一五八、一六五
范寬	一一二、一三〇	方以智	一九二	文徵明	一六六
馬遠	一一六、一〇八	馬相舜	一九七	文衡山(文徵明ヲ見ヨ)	一六六
馬永忠	一一八	鮑嘉	二〇二	文彭	一六六
馬賁	一一八	馬扶義	二〇二	文嘉	一六六
馬興祖	一一八	鮑楷	二〇二	文昌從	一六六
馬公顯	一一八	萬其藩	二〇五	文震亨	一六六
馬世榮	一一八			文待詔(文徵明ヲ見ヨ)	一九〇
馬麟	一一八			普荷	一九二
方從義	一四三			文點	一九二
范進	一五二、一七四			文定	二〇三
馬時鵬	一五三			文叔	二〇三
范禮	一五九			文命時	二〇五
潘鳳	一五九				
馬琬	一六四				
莫雲卿	一六六				
莫是龍(莫雲卿ヲ見ヨ)	一六六				
方士庶	一九〇				
樊圻	一九一				
方丈猷	一九二				
八大仙人	一九二				

一五二、一七三

摩羅菩提

四一

ヤ

一四

一四一

一四五

一八二、一九六

揚望

一五

一八二、一九六

揚魯

一七

一八二、一九六

揚修

二七

一八二、一九六

揚子華

三三

一八二、一九六

揚乙德

三三

一八二、一九六

揚體之

四六

一八二、一九六

揚契丹

四八

一八二、一九六

揚惠之

四八

一八二、一九六

揚庭光

六四

一八二、一九六

揚子賢

一一〇

一八二、一九六

揚斐

一一〇

一八二、一九六

揚先哲

一三三

一八二、一九六

揚基

一六四

一八二、一九六

揚文隴

一六六

一八二、一九六

揚維翰

一七七

一八二、一九六

揚恢基

一八八

一八二、一九六

揚晉

一九四

一八二、一九六

揚芝茂

一九七

邊文進

摩羅菩提

一四一

一四五

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

一八二、一九六

人名索引

楊維聰

二〇五

ユ

俞洪

一一三

俞存勝

一六〇

喻希連

一六六

熊茂松

一六九

俞宗禮

一九六

俞培

一九七

俞俊

二〇五

ヨ

姚易

二一

姚曇度

三六

姚彥鄉

一四三

姚綬

一六四

姚裕

一七六

余省

一八二

姚宋

一九五

姚羽京(姚宋ヲ見ヨ)

一九五

ラ

羅窓

一一一

雷濟民

一五九

藍瑛

一六四、一八六、一九九

羅綾

一七四

藍田叔(藍瑛ヲ見ヨ)

一七四

藍濤

一八六

藍孟

一八六

羅牧

一九一

來呂禧

一九五

耶世寧

一九八

リ

劉世寧

一九八

劉白

一五

劉襄

一七、一八、二五

劉且

一七

陸探微

二四、二九、三〇、三二、三三

陸弘胤

三二

劉胤祖

三二

劉瑛

三六

劉殺鬼

四六

劉島

四九

李雅

五〇

李生

六四

李將軍(李思訓ヲ見ヨ)

六四

李思誨

六七

李昭道

六七、六八

李林甫

六七

李湊

六七

李公麟(李龍眠ヲ見ヨ)

六七

李龍眠(李龍眠ヲ見ヨ)

七六、一二三、一二三、一二三、一二三

李仲元

九六

劉南

七九

李漸

八二

李約

八二

李昇

九一

李吉

九二

李愷

九二

劉贊

九二

李祝

九六

一五

摩騰

一六

マ

忘庵(王武ヲ見ヨ)

二〇〇

鮑詩

一九七

濮黃

一四六

墨林居士(項元下ヲ見ヨ)

一一一

梵竺仙

一一〇

李谷

一一〇

蒲師訓

九〇

鮑國資

一一〇

無準禪師

一一一

毛延壽

一五

毛惠秀

三六

毛惠遠

三六

毛陵

三六

毛益

三一

毛允

三一

毛頁

一六四

木庵

一七三

芥鷗

一九八

ホ

乘貞(焦乘貞ヲ見ヨ)

一九七

卜祖隨

一九七

卜久

一八八

薛宜

一六六

米萬龍

一六六

下文瑜

一六六

邊文進

一五二、一七三

摩羅菩提

四一

孟玉淵

一四五

孟永光

一八二、一九六

明帝

二六

民性

一五九

無準禪師

一一一

毛延壽

一五

毛惠秀

三六

毛惠遠

三六

毛陵

三六

毛益

三一

毛允

三一

毛頁

一六四

木庵

一七三</

李迪	一〇七	李煊	一三二	陸宣	一七二
李成	一〇八、一〇九、一三三	李鳳	一三四、一三六	陸旭	一七二
李宗成	一〇九	李衍	一四二	陸巢	一七二
劉道士	一一一	陸廣	一四五	陸叔平(陸活子見ヨ)	一七五
李唐	一一六、一〇七	李在	一五三	陸治	一七五
劉松年	一一七	林時詹	一五三、一七四	劉奇	一七六
陸青	一一八	林瓦	一五三、一七四	劉叔雅	一七八
李嵩	一一八	林効	一五三	李爲憲	一七八
林庭珪	一一三	劉晉	一五四	陸道淮	一九〇
陸信忠	一一三	林廣	一五八	李其	一九〇
梁楷	一一三	李著	一六〇	陸癡	一九〇
李權	一一三	劉俊	一六〇	李世倬	一九二
劉宋吉	一一三	李時	一六四	柳遇	一九六
李從訓	一一三	陸師道	一六六	劉祥開	一九七
李班	一一三	陸士仁	一六六	李岸	一九七
李懷素	一一三	李芳	一六六	陸傑	一九七
李安忠	一一三	李流芳	一六六	劉九德	一九七
李瑛	一一三	黎民表	一六八	利瑪竇	一九八
林椿	一一三	劉淵	一六八	陸時旼	一九九
李德成	一一三	李應	一六九	劉伴阮	一九九
李夫人	一一三				

李因	二〇〇	呂廷振(呂紀子見ヨ)	一七四	王齊翰	八九、一二二
李輝	二〇二	魯治	一九〇	王仁壽	九六、一一九
柳里恭	二〇四	呂翰龍	一九〇	王道亨	一〇四
李世倬	二〇五	呂煥成	一九一	王端	一一〇
		魯學	一九五	王士元	一一三
		魯得之	二〇四	王振鵬	一一三
		呂佐	二〇五	王洗	一一四
				王震	一一九
烈齊	一一	王維	四、六六、六九、七一、七二、八三	王道真	一二〇
厲昭慶	一一〇	王微	二六、三三	王瓊	一二〇
冷謙	一六一	王虞	二六、二七、二九	王瓘	一二一
廖君可	一七二	王羲之	二九	王若水	一三八、一四一
冷枚	一九八	王獻之	二九	王蒙	一四三
		王獻之	二九	王叔明(王蒙子見ヨ)	一五二
		王由	三三	王仲王	一五二
		王洽	四三、七九	王諤	一五三
		王耐兒	六四	王履	一五八
		王摩詰(王維子見ヨ)		王恭	一五八
		王右丞(王維子見ヨ)		王儀	一六〇
		王宰	七九	汪肇	一六一
		王拙	八一	王芾	一六四

王顯	一六四	王立本	一六九	王石谷(王翬子見ヨ)	一八八
王一鵬	一六四	王直翁	一七二	王撰	一九〇
王田	一六四	王宏卿	一七二	王敬銘	一九〇
王孟端	一六四、一七七	王乾	一七四	王昱	一九〇
王建章	一六六	王問	一七四	汪之瑞	一九〇
王國材	一九六	王穀祥	一七四	王澤	一九二
王鑄	一九六	王紱(王孟端子見ヨ)	一七四	王樹穀	一九五
王國愛	一九六	王元章	一七七	王式	一九六
王倍	一九七	王原祁	一八一、一八八		
王簡	一九七	王麓臺(王原祁子見ヨ)			
王石	一九九	王煥	一八六		
王武	二〇〇、二〇一	王嶽	一八六		
王勤中(王武子見ヨ)		王時敏	一八六、一八七		
王聘	二〇五	王烟客(王時敏子見ヨ)	一八七		
王德晉	二〇五	王鑑	一八七		
王思任	一六六	王廉州(王鑑子見ヨ)	一八七		
王逢元	一六六	王翬	一八七、一八八		

井

人名索引終

玄黃社發行書目

故田岡嶺雲譯註

◎全部見本

は往復端書に
て申込あれ

和譯漢文叢書

中村不折畫伯意匠裝釘
四六版總クロス美本
全十冊
正價計金拾參圓八拾錢
全部一時に注文
は郵税を要せず

復古は即ち維新なり、ルネーサンスは希臘古學の研究より新らしき歐洲の文明を生めるに非ずや、所謂漢學の復興なる者も亦豈に守舊思想の發動としてのみ見る可けんや、進歩に資せざる復興は無用也、漢學復興にして若し新らしき何物をも我が人文の發達の上に加ふること無からしめば、骨董の玩弄以上に果して何の意義ありや。

既に漢學の復興にして骨董的翫弄に終る可からずとせば、其研究は新らしき方法によらざる可からず、新らしき時代は新らしき様式を要求す、今日は即ち漢學研究の方法に一革命を見ざるべからざる秋に非ず耶。我が漢文和譯叢書は實に此の漢學新研究の爲めに新時代の要求に應じて生れたる者也。

夫れ新時代が漢學の上に要求する所は、其外形に非ずして、其内容にあり、其修辭に非ずして、其思想にあり、今日は漢文として漢文を讀修するを要するの時代に非ず、否繁劇なる今の時代は、漢文のまゝに

漢文を讀むが如き迂濶なる方法を容さず。

且つ漢文は之を時文に翻譯するが爲めに甚しく原文の妙味を損する者に非ず、既に往時に於ても邦人の漢文を讀むは反點棄假名の法によりて翻譯して之を讀みたりし也。今之を假名交り文に書き下したりとて漢文の妙味を咀嚼する上に於て何の逕庭かあらんや、必ず漢文のまゝに非ずんば漢文の妙趣を味ひ得ずとするが如きは一種の迷信のみ。

既に甚しく原文の妙趣を破らずして而して時勢の新要求に應ずべき唯一の漢學新研究の方法は即ち漢文和譯の上に存す。我が漢文和譯叢書は實に諸他和譯叢書に先だちて出で、漢文研究の上に破天荒の試をなして一新紀元を開きたる者也。其譯文の正確と挿註の簡淨とは世既に定評あり、必ずしも贅せず。

本叢書は原文の一字を換へずして明瞭なる假名交り文に書き下し、且つ故事熟語及稍難解の句には皆懇切明瞭なる註解を挿入したるものなれば、之を通讀する者は些の遺憾なく千古の名文を味ひ得ると共に其中の成語成句等を學び得べく、若し之を原文と對照する者には無上の好案内たるべし。書目如左。

第一編 和譯老子莊子

全一冊 正價 金壹圓 郵稅 金拾貳錢

虛無主義自然主義は必ずしも近代の産物に非ず、二千載の前、天既に絶高の才を支那に下し、絶奇の文によつて虚無自然の哲學を説かしむ、老壯是れ也。今の世の名利に焦燥し、死生に煩悶し、小是非小懷疑の岐路に彷徨する者は、須らく來て此書に參すべし。汝を挈げて現實の桎梏より脱し、窈冥愉悅の無礙自由に遊ばしめん。

第二編 和譯韓非子

(地圖附)全一冊 正價 金壹圓貳拾錢 郵稅 金拾貳錢

韓非子は東洋のマキアヴェリー也。慘礪なる其説、冷峭なる其文、觸る、所皆血を見る。人情輕浮刻忍に、誑詐陰險、誣陷擠排是れ事とする今の時に當りては、韓非が權謀術數の論も、亦處世の要訣たらん。

第三編 和譯戰國策

(地圖附)全一冊 正價 金壹圓貳拾錢 郵稅 金拾貳錢

戰國の時策士說客雲の如し、旁午として列國の間に馳騁し、其智を殫くし、其辯を窮めて以て縱談横論す、舌頭火あり唇吻爛を噴く。戰國時代は實に支那に於ける思想の最高潮時代たると共に、又辯論に於ける最華燦時代也。一部の戰國策は即ち人間智辯の結晶にして而して又險仄なる處世上の要訣たり。

第四編 和譯荀子

全一冊 正價 金壹圓 郵稅 金拾錢

荀子は孔孟と相並んで亦儒教の大オーソリチー也。而して其性惡論は正に近世の西洋倫理説と一致す。本書依例譯文暢達註釋明透の外に卷頭に四十頁に渉る荀子評論を掲ぐ。荀子を中心として縱横に支那思想を論破せる者、是れ一部の先秦哲學小史なり、壓搾せられたる支那思想史なり。

第五編 和譯史記列傳

上下二冊 正價 各金壹圓貳拾錢 郵稅 各金拾貳錢

史記は二十二史の冠冕にして、其文は千古の絶稱たり。就中列傳七十、英雄の風雲、兒女の柔情、正邪忠姦、賢愚淑慝、各人各様の態を盡して、筆鳴り、墨躍る、苟も漢文をいふ者は即ち此書を讀まざる可らず。

第七編 和譯七書

附 鬼谷子 全一冊 正價 金壹圓 郵稅 金拾錢

◎武經七書、即ち孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、唐太宗李衛公問對と鬼谷子とを收む。甲兵を陳ね矛戟を列ねて而る後之を戰と云ふのみに非ざる也。宇宙は一大戰場也、何れの處何れの時か戰にあらずらん。武經七書之を兵法といふと雖も、亦一種の處世術也。人に克ち、人を服し、人を制する秘訣自ら備はる。鬼谷子に至つては縱横家の祖、揣摩捭闔の權謀を説いて徹に入り妙に通ず。

第八編 和譯淮南子

全一冊 正價 金壹圓貳拾錢 郵稅 金拾貳錢

淮南子(なんじ)は漢代に於ける一種のエンサイクロペヂヤなり。儒と云はず墨と云はず道と云はず先秦諸子百家の成句苟くも益ある者は盡く收めざるなく、上は三皇五帝より下周秦に至る迄の故事苟くも傳はる者は盡く載せざるなし。而して人事百般に涉りて此が應用を説く淮南子一部は、實に一種の處世訣、道徳訓たるのみならず、亦一種の金言集なり、格言集なり、將た又一種の文章辭典なり、故事辭典也。

第九編 和譯墨子列子

全一冊 正價 金壹圓拾錢 郵稅 貳錢

戰爭を非とする平和論者たり、奢侈を非とする勤儉論者たり、而して又有神論者たり博愛論者たる墨子の説は、周末諸子中の一異彩也。其説亦現代の時弊に中る者多し。但其書錯簡誤脱頗る多く、先秦諸子中最も難解と稱せらる。嶺雲先生其一家のみに據り傍ら古今の諸註を參酌して之を校訂し、渾然として復疵瑕を留めず、本文既に讀易きを致し挿註また叮嚀を極む、墨子竟に難解を憂へず。列子は即ち道家中別に一家を樹つる者、其説は虛泊寥澗、其文は簡勁宏妙、老莊と併せ讀むべき者也。

第十編 和譯春秋左傳

全一冊 正價 金壹圓貳拾錢 郵稅 各金拾貳錢

孔子春秋を作りて亂臣賊子懼る、左氏乃ち經に因りて史實を敷衍す所謂左氏傳是れ也。春秋に三傳ありと雖ども叙事の詳贍なると文章の艶富なるに於ては即ち獨り左傳に推すべし、其の叙事は即ち周末の歴史に於ける唯一のオーソリティーにして、其の文章は或は之を莊子と並稱して先秦文中の白眉なりと絶稱せらる。但動もすれば行文奇古にして讀み難きを憂ふ。本書譯し得て極めて平明、以て讀書子座右の好侶とするに足らん。

第十二編 和譯東萊博議

全一冊 正價 金壹圓參拾錢 郵稅 金拾四錢

東萊博議は左傳の史論集たるに過ぎずと雖ども、呂東萊が識見學問文章傾倒して盡く此の中に在り。立論切實、筆端縱橫、言は必ず肺腑に入り、説は必ず情偽を決す。左傳を讀む者は併せ看んことを要するのみならず、苟くも文章に志ある者此書に熟せば、庶幾くは筆を執つて蒼滯なく想を遣る自在を極むるを得んか。

新時代の最大要請は時間と努力との節約也。本叢書は此要請に應じて生れたるもの也。

本叢書に對す。評文中の寸言拔粹。

●東京朝日新聞評 譯文の簡淨と註解の明晰とは此書の特色也。 ●萬朝報評 つくづくこの最も進歩せる形式なるを思ふ也。 ●報知新聞評 譯文註釋共に嶺雲氏獨特の異彩を放つ。 ●讀賣新聞評 多くは譯者其人を得ず加ふるに杜撰然一頭地を抜ける所以のもの。 ●二六新聞評 近時出版せられたる本書に比肩すべきものあるを見ず。 ●日本及日本人評 眞に漢文和譯書中の魁也。 ●大阪毎日新聞評 近時漢文和譯物中の白眉に足る。 ●東京毎日新聞評 吾人は未だ嘗て此の如く氣の利きたる思付に接せざる也。 ●時事新報評 印刷製頓も亦其姉妹篇にゆづらず 頗る善美を盡したるは何ぞ

備内

此篇、人臣固より信ず可からず、其妻子も頼む可らざるを説く。

人主の患は、人を信ずるにあり、人を信すれば、即ち人に制せらる。人臣の其君に於けるは、骨肉の親みあるにあらざるなり、勢に縛せられて事へざるを得ざるなり。故に人臣たる者は、其君の心を窺視ウカガフして須臾も之れ休むことなし、而も人主は怠傲して其上に處る、此れ世に君を切し主を弑するある所以なり。人の主となりて大に其子を信すれば、則ち姦臣は子に乘じて以て其私を成すことを得。故に李兌は趙王の傳となりて主父武靈王を餓えしめき。人の主となりて大に其妻を信すれば、則ち姦臣妻に乘じて以て其私を成すことを得。故に優施俳優名は麗姫晉ノ獻公に傳となり、申生申生を殺して奚齊麗姫ノ子を立てぬ。夫れ妻の近きと、子の親きを以てして、而も猶ほ信ずべからずんば、則ち其餘は信すべき者無けん。

且つ萬乗の主、千乗の君の、ハ后妃夫人、適子の太子たる者ハ、或は其君の蚤く死せんことを欲する者あり。何を以て其然るを知る、夫れ妻は骨肉の恩あるにあらざるなり、愛すれば則ち親み、愛せざれば則ち疏し。語に曰く、其母、好愛せらるれば其子抱かると。然らば則ち之が反對たらば、其母惡まるれば其子釋てられん。丈夫、五十にして色を好むこと未だ解けざるに、婦人は年三十にして美色衰ふ、衰美の婦人を以て、好色の丈夫に事ふ、則ち身疏賤せられて、其子の主とならざるかを疑ふ。此れ后妃夫人の其君の死を冀ふ所以なり。

唯母、后となりて子、主たれば、則ち令の行はれざることなく、禁の止まざることなし。男女の樂み、先君先代より減せずして、萬乗を擅にして疑はれず。此れ耽毒耽毒扼味暗中の用ひらるゝ所以なり。故に挑左春秋名に曰く、人主の疾みて死する者、半に暗能はす害セラルと。人主此理知らざれば則ち亂、資多し福根多。故に曰く、君の死を利とする者衆ければ、則ち人主危しと。故に王良御者の馬を愛し、越王勾踐の人を愛せ

高橋五郎先生譯

セネカ論説集

總洋布製
美本全一冊
正價一圓四錢
郵税十四錢

羅馬の大哲人セネカ、世界屈指の論文集にして

セネカの全集たる『人間處世の絶高教訓』ならざるは、智慧の總

篇と呼ばれて、歐米讀書家の愛するものなり、今や此種翻譯界の權

威たる高橋五郎先生『明快暢達』を極む。初もペトコン、

文に興味を有する人、大哲の人生觀の如何に深遠博大

は、之が源泉たる『千載不朽の大文字』として

『日本及日』本人評、日月と光輝を争ふといふも溢美

ならず。又行文の自在でし譯筆の流麗

なる、洵に譯者其人を得たり云ふべし。

高橋五郎先生譯 (新刊)

ラロシ フコーシ 鐵 又名 人生裏面觀

總洋布製
美本全一冊
正價八拾五錢
郵税十錢

知らざる人なし、但其皮肉の徒らに痛辣なるが故に爾々喧傳せら

るゝに非ず、中に千古不磨の眞理を含みて深く人心の機微を捕ふるが故なり

長きも數十行、何れも一唱三嘆、度誦すれば生涯腦底に遺りて忘れん

と欲して忘る能はざるもの夥なり、英譯書の全文を以てす然

らず、いまや全譯成り、添ふるに『英譯書』の全文を以てす然

實業家と云はず、學生と云はず、初も人情の機微に通せんとする者

は必ず一本を座右に備へ、人間學の奧傳ばなれざる可らず、本書は實に

慶應講師 戸川秋骨先生譯

▲總洋布製
金文字入高雅美本

エマーソン論文集

正價一圓四錢
郵税十四錢
正價一圓四錢
郵税十四錢

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソン
なり。加之其文辭最も簡潔にして最も雄勁に、句々みな座右の銘
とするに足る。本書の譯文又精確、忠實と懇切とを盡し、恰も原
作に接するの感あらむ。苟も思想界の事に留意するもの必ず一讀
すべき也。

上 五 (版)

- ◎歴史論◎自恃論◎報償論◎靈法論
- ◎戀愛論◎友情論◎細慮論◎勇壯論
- ◎大靈論◎圓環論◎智力論◎人格論

下 (版再)

- ◎詩人論◎經驗論◎藝術論
- ◎作法論◎進物論◎自然論
- ◎政治論◎名目論◎改革論

高橋五郎先生譯 (十二版)

ベーコン論説集

總洋布製
全定價一圓四錢
郵税拾貳錢

世界論文集の中の王として三百年來學者の争て愛誦する全編五十
八の名什、句々金玉之を讀む廿回、讀む毎に新意味を發見し來
るゝとは眞なり、以て處世經たるべし、以て思想辭典たるべし、い
ま斯學大家の逐字譯成る。

- ◎眞理を論ず◎稱讚を論ず◎習慣と教育を論ず
- ◎死を論ず◎親子を論ず◎青年と老年を論ず
- ◎富を論ず◎忿怒を論ず◎結婚と獨身を論ず
- ◎美を論ず◎戀愛を論ず◎虚偽と假扮を論ず
- ◎復讐を論ず◎旅行を論ず◎學問及讀書を論ず
- ◎逆運を論ず◎貴族を論ず◎名譽と聲聞を論ず
- ◎迷信を論ず◎榮華を論ず◎邦國の眞偉大を論ず
- ◎狡猾を論ず◎團圓を論ず◎人に於ける天性を論ず
- ◎自愛を論ず◎統治を論ず◎事物の變遷を論ず
- ◎交友を論ず◎忠告を論ず◎姉妹及羨望を論ず
- ◎商議を論ず◎運命を論ず◎時形瘵疾を論ず
- ◎猜疑を論ず◎似智を論ず◎仁慈慈悲を論ず
- ◎攝生を論ず◎高地位を論ず◎禮式と禮儀を論ず
- ◎談話を論ず◎無神説を論ず◎從者及朋友を論ず
- ◎幸運を論ず◎功名心を論ず

時事新報評

「……ベーコン論説集は我國翻譯界の重鎮と稱せらるゝ
高橋五郎氏の妙腕によりて遺憾なく邦語に翻譯せられた
り。余は之を原文に對照して、實に譯者の老練せる手腕に
敬服せり。高橋氏の『ベーコン論説集』は翻譯書として最
も成功せるものならん。」

漢學老人 樋口銅牛先生著 (再版)

碑碣法帖談

附 孫過庭書譜 和漢歷代法書

總洋布製金文
字入高雅美本
全一冊
正價壹圓
郵稅拾貳錢

書道の旺なること今日の如きは
稀なり、隨て其根源たる碑碣法帖類の研究日を逐ふて益々
盛ならんとす。然るに之が津筏たるべき書籍の一
も之ある無きは豈昭代の恨事にあらずや。碑碣法帖談は先頃東
京朝日新聞紙上に連載せられて江湖の愛誦措く能はざるものなり
しを、此度多數讀者の懇望に應じて集めて一卷となし、更に評註
を増したるもの、又巻末

和漢名家の筆蹟三十

一葉 (本ウ中亦別に寫真版數十個を挿入す)を加へたり。字を
説くの銅牛先生が書學に於て亦其識見の該博精透なる
は既に公論あり。世に字を書かざる人なし、乃ち滿天下の人皆此
書を一讀せざるべからず。古來の書に於ける問題は此書悉く之を
解決せり。隨つて書の將來に於ける針路も此書また能く之を明か
にせり。書の藝術的價値の如きも、此書之を開發し得て餘蘊な
し。

米文豪エマソン「コンダクト、
オプ、ライフ」を翻譯したる所謂
達人の達觀せ
る處世哲學
にして凡て九
章句々悉く
深遠なる思
想に
富膽な
る
加へ、有り觸れたる成功談の如く
淺薄なるものにあらず、譯筆又精
嚴にして
跌宕奧妙
なる文章思想を解釋す
るに遺憾なし、一編
深高な
る處世經として何人も
國民新聞評

處世論

總洋布製
美本一冊
全一冊
正價壹圓
郵稅拾貳錢

- ◎運命
- ◎勢力
- ◎富有
- ◎修養
- ◎禮儀
- ◎禮拜
- ◎餘論
- ◎美
- ◎迷想

エマソン原著
高橋五郎先生譯 (三版)

高橋五郎先生譯

エピクテタス遺訓

總洋布製
美本全一冊
正價壹圓
郵稅拾貳錢

二千年来天下無比の安心立命經と稱せられ、羅
馬高きマーカス、アウレリアス皇帝は生涯本書を其座右より
離さざりしと云ふ其快論滔滔辯じ去り論じ來る所、痛
なる譬喩諷諭を以てす、眞に天下の絶稱たるに背かず、いまや高
橋先生苦心の名譯成る、致て一讀をすむ。

高橋五郎先生譯

アウレリアス 皇帝 著 瞑想錄

總洋布製
美本全一冊
正價壹圓
郵稅拾貳錢

羅馬の賢帝として名高きマーカス、アウレリアス皇帝の名著「メ
テテーション」の全譯なり、人生觀あり、死生觀あり、苦樂觀あ
り、處生觀あり、全卷十二編四百八十七項皆彼の高遠なる哲理に
基き、縱横に諷刺し、排撃し、苦言し、痛罵する、一々皆察に中り、
宛然麻姑を備ふて癡を掻く大規模錄なり、大提撕
が如く、眞に吾人の日常の大規模錄なり、大提撕
録なり、また巻末に詳細なる索引
録を附して讀者の参照に便せり。

文學 笹川臨風先生 文學 白河鯉洋先生 共編

嶺雲文集

小包料内地十二錢

總洋布製
美本全一冊
正文八三〇頁
正價金貳圓

故田岡嶺雲は一代の文章家也、曾て大學に在りし頃、故藤岡東圃
博士が同學の間にホープ(英國の理智詩人)に擬せられしに對して
嶺雲はバイロン(同國天才的熱狂詩人)に比せられしと云ふ、げに
や其文、字々熱を吐き、句々血に燃え、多感多情にして、偽らざる
はその本領なりき、本書收むる所の名什長短二百五十有餘、人生
を論じ、戀を語り、人を評し、文を談じ、感想記あり旅行記あり
千葉萬紅始ど應接に瀟あざらんとす、苟も文章を云ふ者は必ず
一本を藏せざる可らず。

萬朝「明治の奇矯兒が天才の閃きは
一語一句毎に見えて當年の倂しむ」

時事新「言々句々として肺腑のどん底の
偽らざる告白のばない奇跡に、讚辭を呈する餘裕
事等には本驚畏の眼を見張るばかり」

書に對して唯驚畏の眼を見張るばかり

348
101

世交際法

(三版)

袖珍總洋布製
正價金七拾錢
郵税金八錢

原著は獨逸クニツグ氏の著にして、發行以來數百版を重ね現に同國中流以上の家庭にして其一本を藏せざるものなき家庭寶典の稱あるもの、加ふるに譯文の明快暢達を以てす、多趣有益、讀者一度之を手にせば、恐らくは巻を措くの違あらざるべし。

全編拾九章 一二百二十節

▲報知新聞評 『急所急所を捉へて一の贅語なく斯る書類中の最も傑出したるものなるべし』

(八版)

社交談話法

袖珍總洋布製
正價金四拾錢
郵税金四錢

▲東朝日新聞評 『社交的談話法に關する一切の秘訣を網羅せ國民新聞評 説く、**剷切犀利**にして譯文亦極めて興味ある文、報知新聞評して此種著中の**白眉**に屬す。』

マクス、オーレル著 德富蘆花先生跋(四版)
藤井白雲子譯

「女」殿下

全裝訂
正價六拾錢
郵税金八錢

目次

- ◎ 解し難き女性
- ◎ 結婚せる男子へ
- ◎ 結婚せんとする男子へ
- ◎ 嫉妬は眞の愛情より生ずるか
- ◎ 姑氣質
- ◎ 結婚は男女を助くるか
- ◎ 藝術と戀愛
- ◎ 母親氣質と祖母氣質
- ◎ 戀する男子へ
- ◎ 善き女の缺點
- ◎ 女性の興ふる感化
- ◎ 佛蘭西の戀と英吉利の戀
- ◎ 自分の好きな女
- ◎ 世界第一の美人
- ◎ 女性に男子の如何なる點を好むか
- ◎ 蓮葉女と弄媚女
- ◎ 英吉利の細君氣質
- ◎ 佛蘭西の母親氣質
- ◎ 戀する人の恐しき誘惑
- ◎ 自分の嫌ひな女
- ◎ 感謝は愛情を生ずるか
- ◎ 老處女
- ◎ 看護婦氣質
- ◎ 寡婦の氣質
- ◎ 夫婦の選擇
- ◎ 夫の操縱法
- ◎ 女の嫌ひの戀と女子の戀
- ◎ 圓滿なる貴女
- ◎ 再婚の可否
- ◎ 佛蘭西細君氣質
- ◎ 外拾貳章

大正二年十一月十二日印刷
大正二年十一月十五日發行

有所權著作

著者 中村 鈺太郎
著者 小 鹿 佛海
發行者 東京市神田區雉子町三十二番地 鶴田 久作
印刷者 東京市神田區錦町三丁目一番地 中 島 藤太郎
印刷所 東京市神田區錦町三丁目一番地 神 田 印 刷 所

支那繪畫史
正價金壹圓五拾錢

發行所

東京市神田區雉子町三十二番地
玄 黃 社

電話本局二〇九番
振替口座東京七九九五番

348

101

終

